每月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治二十九年十二月廿五日發兌



第九拾貳號

口繪＝大奥煤拂
社說＝不注意と不親切
科學＝海の世界
史傳＝加賀の千代（其の学生）
アントニオ、カノバ　山口入杖
雲の峯（下）　三鷹子
歳暮の女湯　桐酒舍女史
ちやく〱馬（下）　五行子
三人兄弟　湖處子
文藝＝埋火
群書解題＝徒然草
家政＝話のくさ〲、色、正月遊び、歳暮の家庭、内職案内
社交一班＝新年流行物
雜錄＝松茂婦人略傳、於社影
歌苑＝厭世家の天地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

價定冊五錢拾二冊五拾錢郵税壹冊五厘

春期大附錄

家庭雜誌第九十四號（卅年一月廿五日）

漁師の娘　蘆花生

霞が浦邊に咲き出でし蓮の一本、汚より出でゝ汚に染まず、惜しや早く散りしかど、香は長き短物語、

金魚の盞　二十三階堂

崎陽に買人あり、世々金魚を商ふ、一年長風に乘じて浪花の津に到り、逍遊百日、身は徒に朝市に走つて心空しく陶朱の富を羨む、誤つて千金を流水に委し、されば魚魂長なへに盃中にとゞまる、長柄の長者が庭園の景趣は舊日本の面影を遺し、金魚賈が昔語は德孤ならざる冥理を説く、

少女おなみ　春夢

廣又濶、無窮無極の天地間、山岳の大、海洋の浩を存すと雖も、而も十四歳の一少女を容るゝ能はず、父にして父にあらざる父、母にして母にあらざる母、子にして子にあらざる子、此間に起りし悲痛凄惋の社會小説、今や作者筆を起して經營慘憺中に在り、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊

警世雜著

内村鑑三著

定價金廿錢

郵税金四錢

本月七日發賣

本書概目

◎公德私德の分離◎實益主義の國民◎自營的國民◎國民の罪惡と其建築物◎方針の定まらざる理由◎東洋の青年國◎俗吏論◎小なる日本◎流竄錄◎白痴の教育、新英洲學校、亞米利加土人の教育◎何故に大文學出でざる乎◎如何にして大文學を得ん乎◎日蓮上人を論ず（一、二、三）

風あり雲起つて。天地晦迷。忽にして電雷轟々。忽にして暴雨沛然。――俄にして天晴れ地淨く。――玉兎東岳を蹴つて。爽氣人に迫る。――これ本書一讀の感。更に再讀三讀すに至ては。拍案の奇自ら生ずるを覺ゆ。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

簡易料理

二版　富猪一郎著

家庭叢書第八巻　定價金十錢　郵税金二錢

第一 靜思餘録

第十六版　德富猪一郎著

國民叢書　定價金十五錢　郵税金四錢

荻生徂徠

七版　山路彌吉著

定價金十八錢　郵税金四錢

新井白石

三版　山路彌吉著

定價金十八錢　郵税金四錢

青年と教育

八版　德富猪一郎著

定價金十五錢　郵税金四錢

簡易生活

二版

社會叢書第二巻　定價金十錢　郵税金二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

社界叢書第六巻

學問の應用

定價十錢　郵税二錢

篇を分つ五日く(第一)學問(第二)學問の種類(第三)學問の撰擇(第四)學問の方法(第五)學問の應用…説き來つて懇切文章平易を旨とす今や我多望なる幾萬の青年は彼等が學びたる學藝技術の供給に窮しつゝ無能無爲なるが如く徬々たり此書以て指南車たるを得ん

●●●●經濟雜誌評　學問若しさ雖も其の應用を誤るさきは國家の爲め、自己の爲め、害あるも益なし、此書は丁寧に學問の應用法を說明せり、學生及び學に就かんとする者の爲めに有益の書なり

●●●都新聞評　一小冊子なり固より詳密の意見を示したるものにあらずさ雖ども此書に就て死學者たるを免かるるの道を解するは之を近なりさは云ふべからず

●●●●東京朝日評　社界叢書第六卷なり第一章より第五章に亙り即ち學問の種類、撰擇、方法、應用に就て深切に論述せしなり

●●●●●早稻田文學評　社會叢書の第六、學問の種類、撰擇、方法、應用等を說きたり、學問の撰擇を說いて、天性、嗜好、時勢の三適を舉げたるなどは善し、されど其の關係を明めざれば往々にして蹉躓することあり、天性さ嗜好さ反するが如き場合、最も少年の踏み迷ひ易き所なり、」

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

柴四朗君、德富猪一郎君序　菊池謙讓著

朝鮮王國

四六版 六百頁
定價五十錢
郵税八錢

○日本新聞評●●●●●●　朝鮮實に是れ我邦人の忘れんと欲するも忘る可からざるの國たり、しかも其伊藤内閣が朝鮮に於ける蹉跌は爾來又前日の意氣を見ず我人心失望の結果は漸く此考究問題を抛棄し去らんとして徒らに渡韓人の跳梁に一任するに至るの風となれり豈慨す可きの事ならずや、是に菊池謙讓君は久しく彼地に在つて其事情に通ぜるの士嘗つて十月八日事變を以て獄のに濟島につながれしは世人の知る所其半島問題に就いて論ずるもの又一日にあらざる也、而して今や朝鮮王國は此朝鮮通の分子が手によつて吾人に紹介せらる其滔々たる商賈書と其撰を異にせる固より其所たるべし、一讀地理部社會部歴史部近世史に分ち秩序整然一讀能く其事情を知らしむ蓋し王國大体の事を知るに於て適好の書となす可し、志士一本を坐右に備へて可なり

○大日本の評●●●　朝鮮半島の半ば衰亡に陥せるを嘆じ、慨然として筆を執るもの、菊池謙讓氏の『朝鮮王國』となす氏は熊本の人曾て朝鮮に遊び、居風生の名を以て國民新聞紙上に通信したるもの屈指に遑あらず。其親しく遭遇し觀察したる所のものを洗つて、半島の地理、社會、及歴史を描く、『朝鮮王國』は是なり。昔は史家ギッボン少壯にして羅馬に遊び、ジユピトルの太廟に晩拜の頌歌を聞き、浩嘆長嘯して羅馬帝國衰亡の史を編するに至りしを聞く、氏が此書ある、寧ろ其家屋頽壞の裏に坐して、アラヽン曲を聴きしに發したるならんや。若然らんには其文辭の悲壯沈痛なるは當然なり。『東方大陸の末日は、弱を以て落日が留むる能はざるか』、と云へる劈頭の一語を讀誦せば、全編五百五十七頁『而して此時に當りて滅亡するか、獨立するか』と云へる結果の一語に至るまで、其如何なるインスピレーションに感觸して此大著(當今の群小著書に比して)成したるかを知らん。●●●●●

○早稻田文學評●●●●●　彼の半島王國を「地理」「社會」「歴史」の三部門に分ちて説明叙述し、且地理部は、成るべく政治上、歴史上、商業上に關係ある大躰の記事に止め、社會部は根本的解釋が主として歴史部は最も力を最近世史、殊に三年來我が國と關係ありし政變に用ひたりといふ、蓋し著者の專ら之れを以て目下政治問題の上に必要なる朝鮮國の解釋を與へんとするに在るが如し、而も政治問題以外に關しても、讀者を啓發する所尠からず、加ふるに著者が身親しく近日の政變に遭遇して渉らしたる感慨紙上に溢れ間々悽愴の文字を爲せり云々

○明治評論評●●●●　朝鮮王國は菊池謙讓君の著なり、君夙に東方問題に注目し、且つ久しく朝鮮に在りて其事情を觀察し、王國盛衰の由る所を審にすること人に過ぐ、故に朝鮮論は君の最も得意とする所なり、本書は筆を山河都城の地形より起して社會を叙し、習慣を叙し、制度を叙し、宗教を叙し、王室を叙し、政府を叙し、歴史を叙し、之れを終るに日本の對韓策、列國の關係を以てし、滔々數千萬言慨然として古今を俯仰するの概あり、蓋し朝鮮に關する著書多しと雖も、未だ本書の如く能く王國の眞相を解釋し得たるものはあらじ、其の對韓策に貢すの豈尠少ならんや。君は清韓の實狀に濟さして江湖の人なり、而も胸に韜略を藏し、時に感激あり、手に詩龍の才あり、翰を揮ふ虎の如く、其文間々缺くる所ありと雖も、雄渾暢達詞鋒太だ鋭、最も形勢を叙するに長ず、夫れ得意の筆を以て得意の著作を出だす、其宜なる哉讀一朝鮮王國の當世出色の大文字たる事、其の立論の多少余と異る所あるは他日君と合するの日教を受けむか、妄評多罪。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

雨谷一桀庵著

藤田東湖

定價金十八錢　郵稅四錢

●●●日本新聞評　東湖とは如何なる人ぞより起筆し青年時代、景山公と彼、勤王家としての彼、宗教に對する彼、教育家としての彼、撰爽家としての彼等種々の方向より之を叙せり面白き書ぶりなり

●●●讀賣評　（精細なる本紙二段に涉れる評を試み其結末に曰く）本書は材料に於て體裁に於て文字に於て功一簣を虧くの恨ありと雖世間未だ東湖の爲めに筆を着くる者なき時に當り先づ其傳を草して先賢の遺德を發揮せし功勞に至りては決して少からず而して篇中「東湖の青年時代」は尤も精彩の在る所にして鐵中の錚々たる者と謂はざるべからず余輩固より瑕を以て瑜を掩はざるなり

●●●●教育時論評　藤田東湖は、水戶勤王派の首領が、內外多端議論紛々の間に在りて、悲歌慷慨、勤王攘夷の精神を鼓吹したる偉績を紹介す。梅の如く竹の如し、東湖の面目、歷々として指掌するが如し。

●●●●東京朝日評　東湖先生の性行經歷を宛轉自在の筆頭に描出して其人の面目は躍如たり

●●●萬朝評　余望の寡明を以てすれば兎も角も東湖を論評して冊子を爲せるば此篇を嚆矢とするやに覺ゆ文氣俊快頗ぶる主人公の人となりに稱ふも喜ぶべし

●●●●中央新聞評　近代の偉人藤田東湖の生涯を記述評論せる者叙事精密議論明快筆勢亦頗る勁健なり唯其東湖を贊頌するの處往々誇大に失するは著者の水藩人たるが爲ならんか概評すれば民友社傳記叢書中の好者にして最に發行せる坂本龍馬に勝ると一等なるが如し

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社



結婚紀念詩。歌。短歌募集

拜啓益々御機嫌克く被爲入芽出度存上候陳者妾の愚兄關張次郎儀本月廿四日結婚の祝ひ致度候に付ては此際詩。歌。文章。短歌汎く江湖の賢兄姉より御恵送を仰ぎ編して一冊となし永く家の寶として厚く保存致度候依ては右の內何なりとも宜敷候間妾に宛て御恵送あらまほしふこそあんなれ　穴かしこ

十二月十三日　神奈川縣鎌倉郡鎌倉町小町　關婉子



◎國民之友第十八卷合本

自明治廿九年一月至仝年六月

定價金壹圓遞送料は此外（量五百目）

◎家庭雜誌第七卷合本

自明治廿九年一月至仝年六月

定價金五十錢遞送料十四錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一國に歴史あり、一家亦歴史なくして豈に可ならんや、事實の蒐集は、事に觸れ日常之れを錄記するに非れば得て求む可らず、而して弊店が積年の經驗に仍り、毎年上梓する所の吾家の歴史は非然

一家の内治外交財政教育

に關する項目、一として完備せざるはなく、私人歴史の要領を得るは、後漢史官の右に出づ、器晉せば吾家の歴史を備ふるものは、之に依て其の正義の爲人を識らる、蓋し一回試せし事實は容易に之を抹殺し得ざれば也、加之本店は二十九年吾家の歴史發賣に際し、昧爾に事項に關して購求者の意見を請へり、後半年間に所見を致す者千有餘即ち本店は感謝して之を容れ、以て其

大大改良

を決行したる諸點、茲に一々枚擧の遑なし、嗚呼諸君の歴史は、諸君に出て作らる、只一言すべきは近時紙價印刷の價一頓に騰る、而も本店は例に倣ひ、美麗に裝製して其價を問へば容易のみ

明治三十一年

吾家の歴史

吾家の歴史に載する所の挿繪は、南伯下村爲山先生の羅筆に作る、氣格の神に入り妙に逸したる、一世の摸範とすべく、宛ら提袖譜狀の若し、又書中の俳句詩歌の撰擇は文學上當世に人ありとせらる大家茱先生の手に爲る、みな古今大家の作、蓋し吾家の歴史は審美の材料に富み、文學美術家の好伴侶たるなり、

總クロース金字入上製リボン付定價三十錢郵稅六錢十部以上郵稅無料

舶來極上等洋紙總クロース金字入上製折込リボン。マーブル付定價九十錢郵稅六錢十部以上郵稅無料

東京新橋出雲町一番

警醒社書店

家庭叢書號外

紫式部再版出來

定價金十五錢
郵稅二錢

民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

	定價	地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

速記法

自宅獨習生募集　月謝二十錢　二ヶ月卒業

規則入用者○は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地

速記學專修所

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎四吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿九年十二月廿五日發行

家庭雜誌第九拾貳號

目錄

口繪
大奧煤拂（永井鳳仙畫）

社說
不注意と不親切……一

科學
海の世界……二

年の暮

史談
加賀の千代……其の字生……六
アントニオ、カノバ……出口八萩……一一

文藝
鷺の巣（下）……三鷺子……一四
歲暮の女湯……桐廼舍女史……一七
埋火……俳踏堂……一九

煤はき

談叢
ちや〳〵馬……五行子……二〇
三人兄弟……湖處子……二五

群書解題
徒然草……吹來翁……二八

家政
餅のくさ〴〵……黃花……三〇
嬭母……三〇
子供の希望……三一
ひゞしもやけ……三二
早咲松……三三
色……（同）……三四
正月遊（其一）……（同）……三四
（一）暗號文字……三四
（二）意外……三五
（三）數あそび……三五
（四）ものは遊び……三六
正月遊び（其二）……娛樂生……三六
手物くはへ……三七
膝釣歩行……三七
鼻くゝり……三七
帽子かぶり……三七
額おつつけ……三七
鼻さ耳……三七
蜈蚣々々……三八
經讀々々……三八
山さ川……三九
旗おくり……三九
ころ〳〵……三九
歲暮の家庭……恕哉……四一
內職案內
ライス製造業……四一

歲末歲始の贈物

社交一班
流行の栞……流行子……四三
新年流行の禮服……四三
新年發具（贈物）……四四

雜錄
松蔭婦人略傳……四四
於母影……四六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社説

不注意と不親切

不注意と不親切とは、素より其精神を異にすれども、其形躰に於て往々にして混合視せらるゝことあり、各人の交際間に於ても能く見る所なるが、殊に家庭に於て然るなり。

不注意とは用心の足らぬ事にて、惡意なしと雖、不親切は惡意を有す、斯の如く精神に於ては大差あれども、形躰上より言へば不注意も不親切も殆んど區分し難し。

吾人は此點に就きて切に家庭の主婦なる人に注意を促すものなり、主婦たるものは内に在ては何人より責任重く家政整理の中心に立ちて、臺所の事務より衛生、育兒、裁縫、教育、交際、下婢使役等悉く統轄の權あると共に其家が大なれば大なる程、一通りの心勞にあらず。

さて日々かゝる繁雜なる上に立ちて一々之を處理す、啻に物質を處理するのみならず、舅姑に對する處置、夫に對する處置、小兒、雇人に對する處置其宜しきを得ざるに於ては家庭は常に不快、不平、不滿の氣絶えざるに至るべし。

夫たるものが家庭に居るよりも外に在るかた快樂多しといふものゝ言を聞けば家庭にては外に出でゝ待遇さるゝよりも不親切なりと、家庭の主婦たるもの、豈家庭の王たる夫に對する不親切ならんや、偶々不注意なることありて不親切なりと誤解せらるゝ也。

新婦の多く舅姑に喜ばれざる原因は、同じく不親切なりと言ふにあり、甚しきは之が爲め離婚の不祥を見る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に至るは、是亦新婦の不親切に歸せり、是實に新婦の身にとりては實に氣の毒千萬の事ならずや、新婦たるものは、未だ齡少くして世事に疎きと家事に經驗なきため、不知不識不注意となり、他の目より見る時は不親切と誤解せらるゝに至るなり。

これのみならず、すべて誤解、間違、過失等の本をと言へば、多く不注意の三字にあれば、能々心を用ゆべき也。

昔は伊達家の小臣某、權臣より其主の命を縮めんことを命ぜられ、家に歸れば妻茶碗を捧げて湯を呈す、内に一小蜘蛛あり、姑其不注意を叱す、妻赤面言ふ所を知らず、某忽此事に感激し、主公毒殺の事を思ひ止り、自つから毒藥を服して死せりと云ふ、此談玩味すべし。

天然痘患者の數

此頃東京府廳第五課に於て天然痘病患者の數を調査せしに未痘者にして仝病に罹りたるもの二百八十三人種痘一回濟みの者にて二百七十三人二回三回種痘濟みの者にて四百十八人天然痘濟みの者にて再度罹りたるもの六十二人なりと東京市内にては日々四五十人同患者あり戒心すべき事なり

科學

海の世界

第一　海の事

我等の棲息する此地球の表面は陸の世界といふよりも海の世界といふ方、適當と思はるゝ程なり。何となれば陸地の廣サと海の廣サとを比ぶる時は、『三、六强と一』の割合なればなり。詳はしく言へば一億四千五百五十萬方哩は水にして陸の表面は僅に五千一百五十萬哩に過ぎざるなり。即ち千の中、水面は七百三十四、陸は二百六十六に當るの割合なり。

さて斯くも廣大なる海面をば、地理學者は五大部に區別せり。曰く北氷洋、曰く大西洋、曰く印度洋、曰く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大平洋、曰く南氷洋。

大西洋は新世界(南北亞米利加)と舊世界(亞細亞、亞米利加、歐羅巴等)とを分てり。北は北氷洋の水と合し、南は南氷洋の水と接し、東に歐羅巴と亞弗利加とあり、西に亞米利加あり。

印度洋は北を亞細亞にて閉ぢ、西に亞弗利加あり、東はマラッカ、東印度諸島及び濠太利亞なり。

大平洋は我國の東岸を洗ふ水是れ也。大西洋、印度洋、北氷洋の水を合したる程の面積を有す

大西洋とは諸事反對するも妙なり。大西洋は南北に廣く大平洋は東西に廣し。大西洋の潮流は狹くして急なれども、大平洋の潮流は幅廣くして緩慢なり。

大平洋は其名の示す如く平穩なれども大西洋は荒れ易し。

地球表面に於ける水陸分配に就き、以上の者の外、更らに奇妙なる事實あり。そは陸地は總て北方に偏在すること也。地質學者の語る處に由れば今日も猶ほ地は次第に北方に高まり南方に沈下しつゝありとぞ。此事はノールウェイの海岸などを觀測すは時は容易に證明し得るといふ。

此等の觀測に從へば百年の間に三呎づゝ北方に向て陸は高起しつゝあり、蓋し其理由に至りては未だ十分の解釋なきなり。

水と陸との境界は海岸なり。海岸に或は壁の如く立つ岩礁あり、或は陸地其物か水中になだれ込みし如き平坦のものあり、我國に在りては山陰北陸の海岸は前の種に屬し、南方及び東方は後の種類なり。

さて岸を漕ぎ出で海洋に浮べば、先づ驚くものは水の深きことなり。大洋の深さはどの位ならん乎。此問に答ふることは案外に困難なり。綱に鉛塊を付けて水に投ずれば直に測量し得らるゝか如くに思はる。されど實際は其の如く容易に非ず、水の重積は鉛をして其重

さを減さしめ、水面にて沈下する如くは底に於て容易く沈下せず、故に忽ち潮流のために押流さるゝなり。されば測量者は垂直に鋼は底に達せりと思ふ時、豈に計らんや、半哩も横の方に鉛は流され居ることあり。

ラプレースは天文學上の推測よりして大洋の平均深さを一千六百尋とせり。ハムボルドも之に同意せり。博士ヤングは大西洋の平均深さを五百五十尋とし、大平洋を二千尋となしぬ。

大洋の水を悉く汲み干す時は、全世界の河水之れに注ぎて四萬年ならでは充滿せざる計算を見て、如何に大海の水量の莫大なるかを知り得べし。又た大海の水の重量は全地球の重量の一千七百八十六分の一なり鹹水は清水よりも重き事は能く人の知る處なるが、其比例は清水一千に對する千〇二十七の割合なり。而して彼の死海は非常に重く、普通の海水一千〇二十七に對する一千二百二十八の割合なり。

水清ければ藍色を呈す、蒼空の映ずるが故なり。されど海水常に藍色ならず、陸の近サ、水の深サ、底の色等に由りて影響せらる。黃海の水は黃ろく、紅海の水は紅し。されど白海の名は氷より來り、黑海の名は海の荒きより來る、決して水色の故にあらず、知るべし。白色を呈する水なきに非ず、ギイニヤ灣の水是れなり。カナリー諸島の西方は綠色を呈し、マルダイヴ諸島の周圍は黑色なり。

若し大海の水に含む鹽を悉く分析して集め得るとせば、此鹽の量は北亞米利加の全土を覆に半哩（二千五百二十尺）の厚サを以てし得べし、これを食鹽に精製するも猶ほヒマラヤの三分の二の大山を成し得、アルプス山の五倍が程の分量と成る。

海水が鹽を含むの度は地方に由りて異なる、例令は地中海は普通の大洋よりも多分を含み、黑海、カスピヤン海等は少量を含み、死海は非常に多分を含む。されど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

概して言へば西極に近く程、鹽分は薄らき、赤道直下に近く程、鹽分を増す也。大河の出口の如きは言ふまでもなく鹽分少なし。

大洋の水は絶間なく動搖す、寒温の季候に由り、風雨に由り、日月兩躰の引力に由りて。

海の美は波なり。花の如く碎け、雷の如く轟く。岩に激しては岩を裂き、小石を碎きて砂となす。海の力も亦た波なり。水の深き處は波亦た大なり、波の大を見て水の深さを知り得べし。波に底波といふものあり、其力尤も強く其勢尤もすさまじ。海底の小石や貝殻や其他を遥に打寄するものは此底波なり。底波は海洋到る處にあり。されど尤も人の眼を惹くものは大河の河口にて起る處の底波の働きなり。アマゾン河の舟子は『ポロラ、』の名を以て之れを呼べり。此河口にては春潮の時の如き、六時間を以て滿潮すべきものが僅に二三分間に滿潮し、十四呎より十六呎の高の大波が河一杯に膨れて押寄せ、引續きて同じ大さの波二ッ三ッ計り打寄せ來り、すさまじき勢を以て上流に向ふ。されば河邊の樹木など悉く根こぎの有樣となる。而して遠く六百哩の上流まで此影響を及ぼすことありといふ。

地震のために時としては非常なる大波を起すことあり。海嘯の如き是れなり。今より三十二年前、伊豆の沖にて起りたる海嘯は一萬二千哩隔たりたるカルホオルニアの海岸に其餘波を及ぼしぬ、其間は數時間に過ぎず、されば六百二十哩計の長サの大波が一時間に一千哩の速力を以て波動したる也。

全世界に三大潮流あり。大平洋に一、大西洋に一ッ、印度洋に一、是れ也。これ實に海中に於ける河なり。此河に由りて各地に種々なる季候の變化を與ふ、暖流の注く處は北地と雖も季候温暖なるか如き、然り。

海水が南北兩極にて氷結する理由は啻に兩極の寒冷な

るが故のみに非ず、兩極の海水は鹽分少なき事と、兩極は地球の自轉の速力の遲きが故なり。南北兩極に向て服する四十二度に至れば已に氷塊の海面に漂ふを見る也。五十度に至れば海岸已に氷を以て覆はるゝを見ん。更らに進めば灣や入江の如きは全く氷結せらるゝを見る。七十度に至れば氷塊の數次第に多く其大さも亦た小島の如きなり。更らに十度を進めば海は全く氷結せられ氷山は氷山と一里あり、流れず漂ばず、燦然たる光輝を放てり。氷山と氷山と相打て碎くる事あり、其響雷の如し。

年の暮

放郷は臍の緒になく年の暮　芭蕉
行幸の牛あらひけり年の暮　其角
猿猴の手に手をかるや年の暮　嵐雪
鴉があ雀ちうさて年くれぬ　存亞
歌をよむ身のさうさゝ年の暮　文鱗
股引や膝から破れて年の暮　昌佛
來年は來年はさて暮にけり　露川
すさまじや女の眼鏡年の暮　信德
腹中の反古見分けん年の暮　素堂
小便が大川になる年の暮　北元
巨燵から松風きくや年の暮　賤思
けいはくを申しつくすや年の暮　牧童

實談

加賀の千代

其の字生

元祿の日本、泰平其極に達して人心悠々、元和偃武の時に蒔かれし、學問の種子、萌芽茲に繁茂して、そのかじゝ千紫萬紅の花を開く、其色いづれも美且麗、其芳いづれも馥又郁。幽玄なる哲學あり。深嚴なる儒學あり。溫雅なる和學あり。方正なる漢學あり。精巧なる科學あり。犀利な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る史學あり。各一時に其盛を競ふ、蓋し王朝の古しへも、或はこれに及ばざりけん。

されば、其いづれもの道に於て、千歳萬歳に記憶さるべき巨手大名の人、出ても出たり、多く出でたり、數へ上けんには日も亦足らず。

今其優なるもの丶みについて、僅か其幾分、唯三五の名をのみ語らんに、尺五仁齋は古の道を講じ、林氏の一門は南宋の儒説を傳へ、長流契沖ともに御國のふりを起し、護園の社中頻りに中華の文を語る、師宣一蝶は彩筆華美なる浮世を寫し、祐乘祐光は、一刀複雅せる萬象を彫む、近松は縱横に人生を謠ひ、西鶴は無盡に社會を寫す、斯る濟々たる中に於て、酒落なる俳諧の奥義を極め、陳腐乳臭なる檀林貞門の滑稽を改らため、玆に蕉風を唱道して、所謂平民文學、薪こる賤山かづも是れをなすべく、榾火焚く伏屋の嫗も亦これを解し、志かも天地の妙をうたひ、人道の秘を盡せる、短詩發句の基を固め、永く斯道の祖と仰ぼかる者、名をいはずとも世人疾くにこれを知る桃青松尾芭蕉なり。

一時の秀才來つて其門に相集まり、互ひに其英を競爭せる者、其數最も多く、數ふるに盡きず、述ぶるに盡きず、傳へ聞く孔門の其むかし、弟子三千の盛、當年の樣を今見るが如き次第なりき、盛んなりとたゝゆべし大ひなりと頌すべし。

草庵に桃と櫻とありと、師其口づから人に驕りし、其角嵐雪を始め、世にいふ十哲の人々にも、殆んど、遜くる色なく、綿繡のやさしき心、滔々吟じ來つて、唾皆珠、元祿の清少納言とも許すべき、奇世古今の大閨秀、日本女學の歴史、江戸盛世の期に於て、特筆大々書せらるべきもの、北方加賀の國に顯はれたり。

彼女!!! 其名を千代といふ、傳へて加賀の千代女といふは、彼女なり。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嗚呼盛んなるかな、此閨秀!!!
嗚呼大ひなるかな、此才女!!!
古池や蛙飛こむ水の音、今更に事新らしくいふも愚なり、蕉翁の古池吟、正風ぶりの標準、籍々語り傳ふるもの、此句或ひは知らざるあらん、されど、加賀の千代女が吟、あさがほに、つるべとられて、もらひみづ、誰か知らざるものゝあるべき。

今や玆に物すなる、此大閨秀か小傳、いまだ盡さゝる、節いと多けれども、朧氣に其面影を見るに足らんか。

彼女、寶永の五年、戊子の春三月を以て、加賀松任の里に生る、父は其名詳かならされども漸々普通の文字を解し、多少人にも用ひられしと、隨筆の記者これを語るも、或は附會にもありけんか定かならず、母については、我れ皆無知らず、皆無知らずといへども、流石は彼女が母なりければ、平々凡々の婦女ならざりし、思ひやるに難からず、必ずや多少文を解し、字を解し、風流の嗜好ありし女なるべし。

彼女、俳句に於ける修業は、其こと夙とに始められたり、當初道を支考に聞く、支考は十哲の一人にして、美濃の人なり、東華坊といひ、又西華坊とも稱し、行脚の極意常に三界を家として、弘く八荒四方にめぐる、千代女ついて道を聞きしは、此坊北國に彷徨行きし時なるべし、後又、露元坊といふに從ひ、遂に正風の眞意を解して、千歳不朽かれが如くに成功せり。

秀才、唯俳句に成功なせしのみにあらず、畫をよくして當年すでに其名あり、越の吳俊明に從ひ學びぬ、或時俊明、絹本に朝顏を畫き、汝此下に贊せよと命ず、全躰いづれの畫讃にせよ、其上にせざるもの一つもあるなし、さるを此下に讃せよと命ず、大ひに奇なり、大ひに難なり、彼女、更に後くるゝ色なく、直ちに筆をとつて、

朝顏の、地にはふことを、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あぶながり。

と、讃せしかば、師なる俊明、案を拍て、いたく、感ぜしと、

何等の當意、即妙ぞ。

年やゝたけて、同族の子、六左衛門といふにまみゆ、新婚の夕、

澁かろか、知らねど柿の、
はつちぎり。

と、やゝ卑近の誹はあれど、心は知るき、貞操の意をうたひなせし、かたり傳へ、いひつたへて、其朝顔の吟と共に、多くの知れる所なり。

琴琵相和していと睦まじく、日ならずして一子を擧げたり、最愛掌裡の夜光と、めでにめでしものを、嗚呼天の無情なる、襁褓の裡に奪ひさりたり、悲しみのいとも切なるもの、次の年に於て報はれたり、即ち二度目の產いとも安く、男子生れ出でしもの玉の如し、最愛秘藏、慈に慈を重ねて、守り育てたるもの、僅かに六歳にして又倒ほる、一度ならず、再度の悲しみ、如何んぞ、彼女が錦繡の意を動かさゞる、

蜻蛉つり、今日はどこまで、ゆいたやら。

と、子を先だてし母のおもひ、一字千滴の紅涙、我れ殆んど、讀むに耐へず。

其頃伊勢に乙由といふあり、是亦蕉門の俳士、優に一方に重きをなす、かつてより遠く千代女が名を聞きつたへ、別飛文を送りて、敬慕の意をいふ、紙末一首の句ありて其詞にいふ、

花さかぬ、身は靜かなる、
やなぎかな。

と、同じ時に彼女も亦、乙由が許に文を送る其尾に一句あり、奇なるかな、奇なるかな、

花さかぬ、身は狂ひよき、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やなぎかな。

と、暗に同意、詞符合せし、才と才との暗合、實に文界の奇話といふべし。

千代其文を見て、其句を考がふ、案はともに同じといへとも、狂るの一字、靜かの一字に及ぶべくなく、大ひに乙由の才に伏し、嘆感の意又文をもていやりしとぞ、嗚呼如何に謙遜の念のふかき、流石は婦女の心なり。

起きて見つ、ねて見つ蚊屋の、
ひろさかな。

親愛の夫に別れ、追慕の念、句にあらはる、後髮を剃つて素園と號す、

髮をいふ、手のひまあきて、
とたつかな。

これ剃髮の時の吟なり。

安永四年乙未歿す、年六十八。

一代の吟咏世に傳はるもの殆んど千句、

みよし野に暗一むすび柳哉
草むらの留守に風おく雲雀哉
鍋炭のゆく衛はづかし杜若
てふ〳〵の夫婦ねあまる牡丹哉
秋たつや初めて葛のあちらむく
朝かほは其日にあふて仕まひけり
紅さいた口も忘れて淸水かな
手あくれは結ひ目のなき淸水哉
わけ入れは風さへきえて閑古鳥
綿ぬきや初めて夜着の恐ろしき
足あとは男なりけり初さくら
福わらや塵さへけさの美しき
蝶々や女子の道のあとやさき
百なりや蔓一すぢの心から
一かゝへあれも柳は柳かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（二）蛇くふと聞けば恐ろし雉子の聲

是れ、九牛の一毛なり、又蒼海の一滴なり。
花の如き彼女の香魂、今や何處の天に遊べる。

アントニオ、カノバ　　出口八萩

第一、

伊太利の一村に、ピザノーなる一人の石工住き、家は素より貧にして、完全の石工ならざりしも、德望を有したりき。

玆に又た「ピザノー」が愛でつる一孫兒あり、こは「アントニオ、カノバ、ピザノー」と呼び、父死沒しければ「ピザノー」と同居せんとて來りしが、母は愛兒を可愛くも思はず、而も「アントニオ」に强顏かりし一人の男を夫となし幾程もなく、愛兒を見捨てゝ彼に嫁ぎたり、されば「ピザノー」は　たよりなき孤兒をば愛しむ事一層にて、已が稼ぎの片時すら吾側を離さず愛したり。

祖父「ピザノー」が仕事の間「アントニオ」は側を去らず粘土を以て人の形を造り、或は庭間の石の小切を彫むを此上なき樂とせり、さるを祖父は流石に職業の事とて早くも幼稚なる「アントニオ」が彫刻術に、敏活驚くべきの天才を有せる事を見出したりき。

「アントニオ」漸く成長するに及んで、一日數時間は祖父の業を助くる樣になりぬ。

祖父は愈よ末賴母しき事に思ひ、夕餐の時等は、彫刻家の話し、或は彫刻に就ての歌等を敎へにければ、知ず知ずの內、此等の事は「アントニオ」をして、益々嗜好を增し、想像力を喚起せしむるの料となりしぞ幸なる。

第二、

＊　＊　＊　＊

時に美術の鑑定に英名ある、「シグノル、フェリロー」「ピザノー」の家に隣りて、宏壯の建築を有せしが、一日「フェリロー」は當時天下知名の技術家をば、饗應す事に定めしが素より其人數も少なからぬ故、「ピザノー」も家僕の補助にとて、雇ひ入れられたり、されば「アントニオ」も亦祖父を離れず、往々其厨事にすら手傳をなしたりき。

「フェリロー」が多衆の賓客を饗せる日恰も「アントニオ」は料理場にありて、皿鉢を洗ふに餘念なかりき、時に、料理頭は、憂の顏もて入り來りぬ、時つ今、今日の賓客をば、將に饗せんとする其前、己が受持なる、大机に飾りをなし居りしが、そを如何になしけん、打崩しぬ、ア、何とせばよきぞ、あわれ料理頭は、崩せし後を飾らんとて、有らん限りの力を出しぬ、今は他に考ゆべきの餘裕なし、さればこそ苦にやみつゝ、さては憂の顏もて入り來りしなり。

總ての厨僕は、皆額を集めて、さて如何にすべきと思ひ惱み、時切迫の爲め、心更に定らず、皆忙然たりしに、「アントニオ」は突と進み來りて曰ひき、

ア「もし私に御任せなさるなら、間は合ふものをこしらへて上げましよふ」

料理頭はしげ／＼「アントニオ」の顏をながめて、驚きの聲もて、云ひぬ、

料「お前が………お前は誰れだッ」

「アントニオ」は靜かに答へぬ、

ア「私は「ピザノー」の孫「アントニオ」で御坐います」

料「………してお前は………多分………とふする事が出來るのか」

と最と氣遣はし氣に問ひぬ、

ア「もし阿那多が私に作らせなさるなら、私は大机の眞中に、何か相應のものをこしらへます」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

口も淀ますハッきり答へぬ、此場合に及びては他に思慮を廻らすの餘裕なき料理頭餘義なくも「アントニオ」に任しゝかば、「アントニオ」は多量のバタを取寄せて、蟠居せる巨大の獅子を象りつゝ間なくも成熟せしめぬ、厨僕等は皆手を叩いて、誠に見事よと賞め稱ゆるのみ、料理頭の其時の喜は如何に、愛はしかりし眉根は開きて、嬉々躍らん許り、更に注意を加へて、獅子をば大机の中心に置き据へぬ。

第三、

當日の賓客は「ウェニス」の最も有名なる人物のみ、貴皇子、紳士、紳商及び美術の愛好家あり、而も此内にて又た抜群の美術批評家ありき。

時來て、此等の貴賓は陸續として室に入り、大机に向ひしが、先づ彼等の眼をひきしは、他にあらずして、「パター、ライオン」なりき、衆客一同之に見惚れて、喫煙室に入る事を忘れぬ、ア、彼等を饗應せしは珍味、珍器にはあらで、自然の英才より作り出せし獅子なりき。

客は齊しく精細に獅子をながめて、賞讃の語を絶たず、「フェリロー」に問ふらく、

「そも直に費消さるゝバターに何故かくも熟練の技術をこめしぞ」と、

されど主人「フェリロー」は何者がかく作り出せしやは吾露程にも知らざりければ、順次に厨僕を呼び出して、誰が之を作りしぞと問ひしに、一人の厨僕は「アントニオ」なる由云ひければ、則ち名譽の爲めに、喫煙室に「アントニオ」を呼びたり、されど衆客は、言語の賞讃のみにて滿足せざりき。

「アントニオ」は世界の美術家なり、地方の小技家にあらず、されば客をして滿足を表せしめんには、「アントニオ」を敎育するに如かずとて、「フェリロー」誓ふ

らく、

「必ず良師を擇びて其敎訓の下に置き、其費用萬般吾之を償ふべし」と、

＊　＊　＊　＊　＊

祖父「ピザノー」も其後「フェリロー」の家族に加へられ、何不自由なく其老を養ひ、「アントニオ」は日々汲々として怠るなく「ウェニス」にて研學せり。

「アントニオ」の生活は始終異りなく、其質は淡泊、其性は忠實にして、寸毫も怠慢の色なく、智をみがき、術を練り、少しの油斷なかりければ、遂に世界知名の彫刻家となりぬ。

ア、世界の美術家として、終世世人の記臆すべき、「アントニオ」が其世の第一段梯は眞に「パター、ライオン」の爲なりしなり。

さりもあへすはかなく暮れて行年を
しはしさゝめん關守もかな
（右大臣實朝）

文藝

雲の蜂（下）

三　鷹　子

草はと深き鄙にして、碌々駑馬と相伍し、空しくも糟糠の間に終らんこと、男子の期するところにあらず、さるを思はずも、事のために制されて、興なき片田舍に潛みたる梧一が心、いかでいかで、常に都を思はざるべき、時なるかな時來つて、今や再び東京に出んとす、されば唯さへもいとゞ嬉しかるべし、況してや蠖伸のうれしき音信にあふ、などか〳〵喜ばしからざる、さるをゆめ喜ばしくもなく、更に〳〵嬉しくもなきこと、如何なればぞや、如何なればぞや、實に怪しくも亦奇しきは男女相愛の道なりけり、愛の前には望もなく又慾もなし、女々しきかな我が心、如何なれば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯くはさて女々しきぞと、心を勵まし、身を諫め、切なくも亦苦しき思ひをば漸くに思ひきりて、東京に出でたりけり。間もなく何某の省に出てさる官位拜命せしが、日と共に省內一般の信用まさり、課長に知られて昇進更に過たず、其次の年の半にはいと〳〵重き位に到りぬ、友垣の交はり餘にまされる淸水も我身の事とよろこび、偏に其辛抱をのみすゝめたりけり、或日公務の時間終りてやがて退省なさんとせし折、何事にやありけん課長梧一を呼んで、今宵內々に語るべき事のあれば、必や暮るゝ間もなく、來るべしとぞいへりけり。仰せ承はりぬと別れて宿にかへり、火ともし頃課長の邸に音なふたり、內君も今宵は笑ましく氣に出迎かふて玄ばらくはそれとなき四方山の話に時過ぎしが、今はとて課長梧一にむかひ、御身昇進も人にすぐれ、大ひに一般の信用も厚ければ、我とても大ひに嬉しきこと多し、今宵しも態々呼びしは外にあらず、內助の事について語りたきことありてなり、男子外に出で、百般の事に暇なきもの、そを助く妻なくば、いかで〳〵能ふべき、況んや御身程の地位にあるもの、下宿住居せんこと誠に人の聞く前もよろしからず、疾く〳〵妻をむかへて家を持つべし、其妻として御身に合はせたきもの我が心の內に一人あり、或は若き人の心地にありて叶はざる事もあらん、されどもまげて我が請を入れて、彼女を妻と定めたまへと、內君とも〳〵詞を盡して進むるは、課長の姪にあたるもの、鐵子とて宮川某といふ人のむすめ、年やゝふけたる女なり、不幸幼少にして父母を失なひ、疾くより茲に引とられて人となりし身の、境遇に應じてもいとゞおとなしく且優しかるべきに、生れ得て其さがねぢけ、萬づ我儘氣隨との風聞、誰いふとなく人に知られしかば、耳緣今に遠くしてむなしくも色やがて褪せんとす、さればいふまでもなく心に染まで、一言これを忌まんとは思

ひつるも、今の身のそれも叶はず、よく／＼考へて返事せんと、其夜は暇を告げてかへり、次の日清水に逢ふて此事くはしくも語り、且其女の身もいち／＼話し、いかにも心に染まぬこと、それさへも殘らずいひしに、そはよろしからず、たとひ如何なる女にもせよ、課長がすゝめ、不祥してそを用ひなんには、又々身のためによきこと、必ずや一にあらざるべし、男子畢竟唯名のみ、其他何の事かあらん、世にたてば心に叶はざること、それとなくいとも多きは元よりなり、行末のため、そを耐へて應ずべし、疑ふところあるべからずと、いとさま／＼詞をつくしてこれをいふに、梧一も漸くに思ひを決し、承諾の旨清水して答へしに、課長ならびに内君のよろこび、日ならず芽出度式をあげて、番町のあたり、表札の文字いと新しき住居を搆へぬ。其後はいよ／＼もちひよく、省内一般今は脊を列ぶる者なきまでに、位地いよ／＼進むにつれて、鐵子はます／＼本然の性質を顯はし、梧一の身は我あるが故に今の如しと、思ふ色心に顯はれて、萬づ我意を打ふるまひ、夫としてかしづくに其道のかけたる一にあらず、されば大ひに琴瑟の和合を欠いて、何となく家庭暖かならざるを、強いて強いて、たへ忍び、興なき年月を送りむかへ、更に樂しむところもなきに、かてゝ加へて、人の口々、或は駙馬よ、腰ぬけよと、一は其位地を羨むより、日ごと／＼耳にする冷評の數々、もし相愛の情ふかく、洋々として一段の春風常に室にたゆるなくんば、斯ることそれ何かあらん、さるをすべて今の如し、恰も針の筵にあるのおもひ、如何にも今は耐へかねて、離婚のことをいひ出でしに、如何かなしけん、一度の調停さへなく、直ちにきゝ入れられて、鐵子は引とられたり、其翌る日荷物盡く送りかへして、ひとり、廣々たる部屋にありしに、突然飛び來りし一葉の辭令書、免本官の三字事單簡にしてすゝそ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つきたり、世のつねの人々、悲しかるべき斯る辭令も、梧一は却つてうれしく請なし、直ちに元の姿となりて、神田邊の下宿の二階、二度獨身の人となりて、なすこともなく日を送りしが、思ひ決して又々さきの田舍にかくれ、純然たる村夫子となつて、木綿の袷木綿の袴、過ぎし年爐邊に私語せし人をむかへ、夫師弟に敎ゆれば妻は機おり、僅かなる俸給に元より華美なることはならず、後園の蔬菜色黑き麥の飯にあはせて、たゞ〳〵空腹をたゆるあるのみ、省内用ゐよかりし日に、比べてこれを見る時は、殆んど天地の相違もあらんか、されども更にうらやまず、嬉々としていとも滿足氣に、其日〳〵を送れる内、愛らしき男の子さへ出來たりしとぞ。

《完》

歳暮の女湯

桐迺舍女史

ヲヤ〳〵大變込でサァ御免よ〳〵アラマァ何方かと思たら御隣家の女房さん御誘引申せば能かつたのねへ此頃は隙がないので碌々御話しも出來ませんでねへ子供を學校へ遣りますとそれ試驗だのまた一月は授業始めだのつてまさか捨ても置かれませんから着物の一枚もと思ふので宅へ歸ても休間もないのに昨夜の樣な騷も出來るんですものねへありやあお梅さんがあんまり我儘ですよ御亭人が留守になると自分は朝から晩迄亘燵と首引で御亭人の歸つたのも知らずに寐て居てそれで少し遲ひと矢鱈に妬妬すきるから何程氣の能人だつて勘忍袋が破けたんで其破けたんで思ひ出した通りの油屋さんでは此度双子が生れたつて何たか喜びをいふのも氣の毒らしいと思て居ましたらねへ家内中大喜びで世間の人は女の子が一人生れてさへ目出度がるに男の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子が二人揃て生れるなんて是程目出たい事はないつて今年は餅も澤山搗そうです外聞がわるいじやあ有ませんか「チギヤア〳〵」「アライヤダ來ましたよ又日向水にされちまハア………チヤ〳〵〳〵差配さんの御孃ちやん能いらつしやいましたねへお松どんとソウ御乳母さんもチヤ〳〵御母樣もマアとすこし怯みしが俄に高く笑ひ御新造樣飛だ失禮を致しました御湯も汲ませんでサア信實に貴婦御孃ちやんか能御容貌でそして御利口て三味線も能御出來なさるつて皆んな評判致ますよ日外の御祝も大層御立派て宿の子供迄何樣にお羨やみ申たか知れません又御正月の御衣服は白木ですか大丸ですか帶々はヤツパリ増見屋か宜う御坐いまいますねへそして早く御島田に私か結ておけるやうに御成遊はせチ、それつてば御新造樣遂〳〵御無沙汰はかり致して濟ませむ宿ても夏以來種々な事か御座ましておまけに先達は妹の竹を縁付ましたり彼や是やで申譯も御座いません實に濟ませんか何れ初結ても濟せますと屹度上ますから

旦那樣へよろしく願ますチ、寒く成たどれ暖まつて參りませうと迯るが如飛込とたん表から「カアヤチヤンが歸て先程から待て此節季にいつまで何をして居るんた湯氣にても逆上たのかつて怒て居るから直に御歸りよう………「喧しい湯氣に逆上る處か身躰か氷ちまつたから今暖て居るんた愚圖々々言すにさつ〳〵と歸んなようと大喝一聲嗚呼漸暖まつたと出て來てチヤ〳〵みんな歸ちまつたよ何處を洗たんたらう馬鹿々しいあんな奴か來たもんたから餘計なお喋りをしてハアークシヨン畜生め風邪をヒカアと呟きなから油臭き衣服を引掛細帶を〆なから下駄を投出す時大時計ボン〳〵〳〵チヤ最早十時たよあきれちマハアなんぼ年の暮だつて夜迄急に短かく去ないてもいゝや燈火をつけて御飯を搔込て來たはかりだにと小言たら〳〵歸り行後見送て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

番臺の女房はんにおしやべさんは一年增によく喋るよあれたから段々得意も落て仕舞ふのた彼樣な人に來られちやお湯屋も大迷惑た早く店立でもされゝはいゝのに此永い夜を短いなんて宵から今迄湯て更して三助をさん〳〵困らせてそれても自分は節季たとか世話しいとかいふからをかしいあんなに喜樂をいつて居際に何か夜業ても爲たらよさそうなもんた併し今頃は噂でもして居るか知らむ……誰とは知らす男湯に聲あり

愚なる心の垢を世の中に
流す湯壺と知らぬあはれさ

下ひもゝ解きて湯壺に入間さへ
口と心はかたく結へよ

うづみ火

俳諧堂

客は去り果てゝ、孤亭夜いと靜なり、四面寂々として更に聲なく、唯おり〳〵に、後庭數竿の修竹、風にそよぐ音をきく、更ふけたる姿ばかり淸きはなし、此時案上の山家集を讀みもてゆけば、神いよ〳〵冴えて眼ます〳〵明らかなり。或は狂するが如く、又は世を厭ひはてつるが如き、上人の面影左右に伴なひ、身はこれ汚れたる世の人にあらず、一部こと〳〵く閲し終りて我にかへり、うたゝ膝の痿えたるを覺え、又手の凍えたることを感ず。火著もて火桶かき探れば埋火の二つ三つ、幽かに消えのこりたるものこそ、こよなき夜半の侶なりけり。更に炭を加へて、再び殘陶の酒を暖ため、三杯喫しつくして愁ひ頓みにふかし、來し方行く末の斯くも頻りに思ひ出さるを、何とて古の人はこを忘憂のものとはいひし。たま〳〵千鳥の八聲七聲、かすけき玉川の流れに和してきこゆるにも、先づ故里こそ思ひ出さるれ、おもふもはてしなければと、枕書そのまゝに、身をわゝげたるたくぶすまにおほひ、一

睡東方の白きを知らず、

數ふれば十とせにあまる旅ねして
故さと戀ひし夜半の埋火

＊　＊　＊　＊　＊

埋火にふるさと戀し小夜千鳥

煤はき

すゝはきや塵にゆかしき枯葵　嵐亭
大黒の日南ぼこりや煤はらひ　乙由
なでゝおけつきせぬ宿の煤拂ひ　尙白
いづかたに行て遊ばん煤はらひ　擧白
すゝはきや走つて通る京の町　月化
すゝはきのほこりかつぐや奈良の鹿　太祇
大内や伽羅の烟のすゝはらひ　卜枝
煤拂梅にかけたるひさごかな　一髮
煤はきの疊もたすな梅の花　沾德
すゝ拂ひ不動に似たる眼かな　木導
はづかしき人にあひけりすゝの門　斑象
たび寐して見しや浮世のすゝはらひ　芭蕉
はゝはきの夜はきれいな寒さかな　如舟

談叢

じや〳〵馬（下）

五行子

馬と猫と雛とは、打つれていろ〳〵さま〴〵、世間ばなしなんかしながら、急がうともせず、ぶらり〳〵と、笑つたり、歌つたりして、歩くのですから、一向道がはかどらない、僅かに六七里も來たかと思ふ時にはや其日は暮れて仕舞ました、だん〴〵とかつたるくはなるし腹はへつて來るし、それに道は別らないし、みな〳〵大よわり、大へこみです、猫はがまんがしきれなく、

『ほんたうに、仕方がないねー、日はくれるし、腹はへるし、アヽかつたるい〳〵』

『さうさねー、仕方がないねー、馬さん何處かこの邊に、お前さん知つた家でもないのかね、そこへ、

でも行てとまらうじやないか」

雛も詞をあはせ、猫とおなじ様に、なき顔をしてたづねました、

『イ、ソニヤ此邊は始めてだから、知つたところなんか一つもない、よー又、知つたところが有つたどておまいさん、そんなところへ行けるものかね、よく考へてお見なさいな』

『なぜ、なぜいけないて』

猫と雛とは問ひました、

『なぜて、直くに元へ、元の飼主へ連れて行かれるじやないか』

『さうだ〳〵、それに違ひない、さう思へば危難だ〳〵、知つたところのない方が結構だ、おうさうだ〳〵』

今さらの様に猫は感心する

『それじや、此まゝ何處へも止まらず、今夜よつぴてあるくのかい』

雛のいふのを馬はすかして

『まあ〳〵、今少しがまんしなさい、今にどこかよいところか見附かるから』

やつとのことで、がまんさせ、七八町もあるきました、すると向ふの方の森の中に、あかりが一つ見へました、猫は一番にこれを見つけて、

『やあ〳〵むかふの方に、あかりが見へらあ、』

『成程、あかりだ、あれを目的にまづあしこまで行きませう、雛さんもう少しだから、さあ急ぎなせー』

大急ぎで、そのあかりのところまで馳けつけました、すると一軒の家があつて、硝子張の窓が、まだ戸も閉めないであいて、居ました、むかふからあかりの見へたのは此窓から見へたのです、

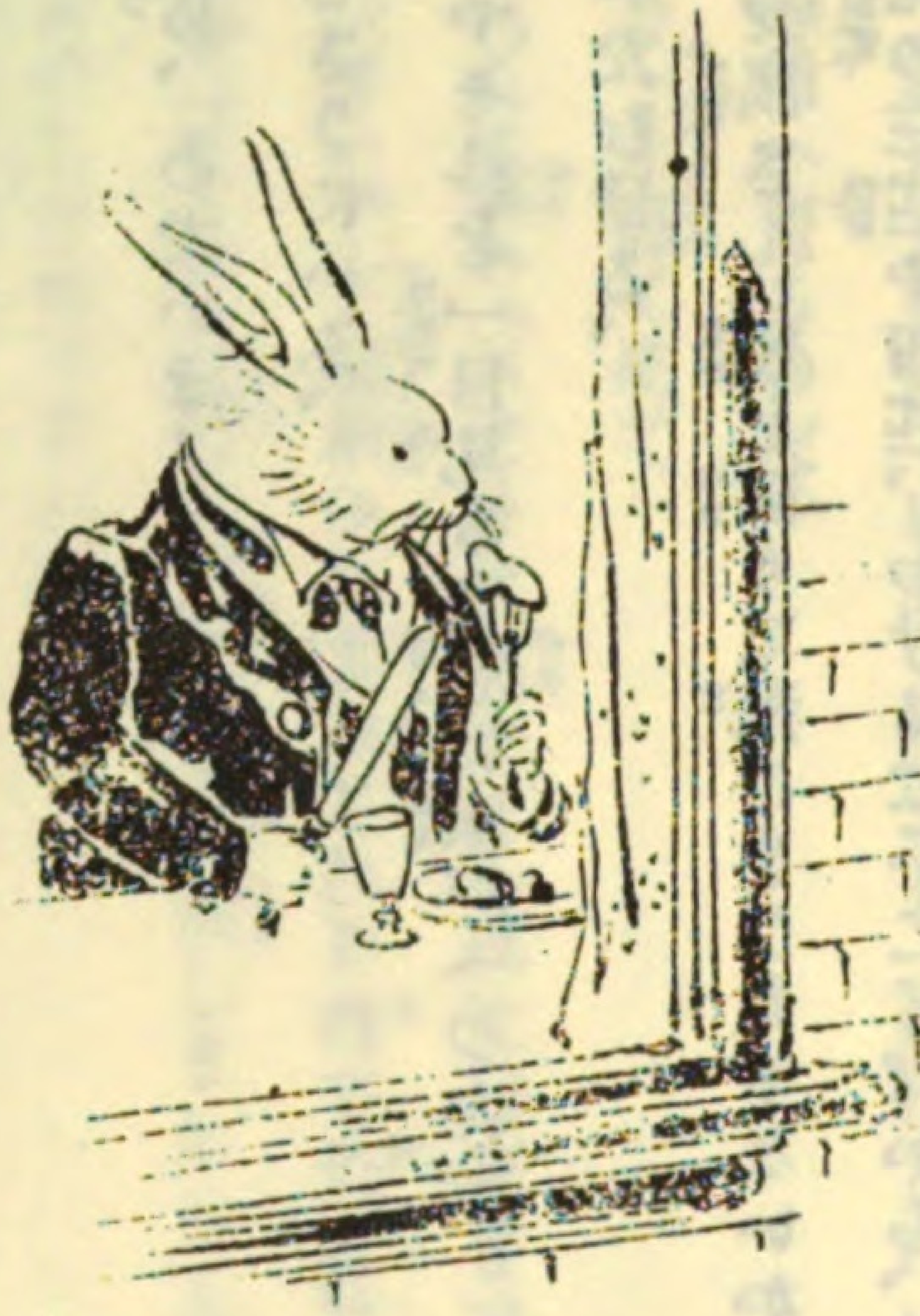
『やあ、これは立派な家だ、誰が住んで居るんでし

やう、馬さん、雞さん御存しかい』
『イ、ヤ知らない、然しこんな山の中に、多分人間じやなからう、何にしても幸ひだ、まどが明いて居らあ、ちよつとのぞいて、内の樣子を見やうじやないか、雞さんお前さんは身が輕いから一寸何處かへ飛び上つて、』
『飛び上つてたて、上る處もないじやないか』
『さうそうだ、あたりに木の枝もなし、するからほんに上る處がない、ところでかうするさ、』



『だうするの』
猫は馬にたづねまし、
『おれがかうやつてるから、虎さんお前おれのせなかの上へあがんなさい、そして雞さんは又虎さん

のせなかへ上る、すりや丁度イ、鹽梅に内が見へ
るさ』
『成程そりや、よからふ』
猫は馬の上に上りました、
『さあ〳〵雞さん、早く〳〵』
『チツトこうかい』
雞は猫の上にあがつて、
『こいつは妙だ、實に妙だ』



『妙だ〳〵ッて、だうだな、よく見へるかな』
馬は下からたづねました
『見へる〳〵よく見へる』
『一通り見たらおりなさい、』
雞は上からおり、猫も亦おりて、内の様子を馬と一しよにきゝました、
『人間じやない、兎だよ』
『さうだらう人間じやなからう』
馬はいふた、
『して、其兎がなにしてるね』
猫はたづねた
『何してるて、大さう甘くやつてるのさ、親子三人、むかひあつて、芋の煮たのだの、肴のやいたのだの』
『ウンウン、食つてるのか』
猫は喉をごろ〳〵いはしながら、ひざを進めて問ひか

けた、
『畜生め、あたいま〳〵しい』
馬は羨ましさうにいふ、
『おりやそれを一目見ると急に腹がへつた』
雞は小首かたむける、
『だうだ馬さん、窓を破りて飛こまうじやないか、高が兎の三匹や四匹、わけもないことだから、さうしやうじやないか』
さすが盗賊猫のはんねをふきました、
『さうさなあ、やつッけやうかなあ』
馬も賛成した、雞も賛成した、そこで皆々一つになりて力まかせ、窓をやぶりて猫は中へとびこみました、そして入口へまわりて戸を明けたから馬も勢込んで飛込ました、猫一匹にさへびつくりした兎の親子は大きな馬にいよ〳〵恐れて、たう〳〵窓から飛び出して、向ふの小山の小松の小蔭へ逃こみました、あとには馬と猫と雞とが此家を占領してしまひました、食物も飲物もなか〳〵澤山ありますから、みな〳〵大ひによろこんでそこに止まり、毎日毎日、飲んだり食つたり、東京へ行くことも何も皆忘れはてゝ、仕まいました、それに引かへて可哀想に三匹の兎は自分の家を取られて仕舞ひ、羨ましさうに、朝から晩まで家の方ばかり見て居ます、丁度それから十日目のことです、一人の男が鐵砲を持てはいつて來ました、馬は何かと思ひながら前に出て
『お前さんは何です、何か用事でもあるのですか』
『さう、私しは獵夫さ、兎を取りに來たのさ、此處に兎が居る筈じやが、居ないかい、だうしたのじや』
『兎は先達てから、よそへ引越しました、ハイ此處には居りません』
頻りにかうやつて話して居るのを聞きつけて、猫と雞

と奥の方から、出て來ましたのを獵夫は見つけて、
『兎が居なけりや、雞でがまんするさ』
いひながら鐵砲に玉を込めて、ズドーンと放しましたからたまりません、キヤツといふて雞は死んでしまひました、これを見て猫はびつくり窓から飛出さうとするところを、これも亦ズドーン、馬は逃げてもだめだ、飛道具だから叶はんと思つて、逃げもせず、矢鱈おじぎをして助けて下さいと願つて居ます、その間に獵夫は雞と猫とを繩でしばつて
『さあ、雞は兎の變りに煮て食ふし、猫は皮はいで三味線屋へ賣るのだ』
いひながら一寸提て見て
『こいつは重い、ステキに重い、おれには家まで持ちきれない、丁度幸ひに貴樣これを持て行け』
『それではそれを持て御宅まで御供しましたらそれでよろしいのですか』、
『馬鹿をいへ、それからは馬肉屋へ賣つて仕舞ふのだ』
『それはあんまり』
『ぐづ／＼いふと、おのれズドーンだぞ』
馬は仕方なく猫と雞との死骸を持て、かりうどの後について出て行きました、そのあとへ兎の親子はかへつて來て、初めの通りにくらしました、馬と猫と雞とは飛んだところで兎の身代り、おしい命をとられました、へしこれでおしまい、又面白いのがありましたらおはなしいたしますよ、孃ちやんも、坊ッちやんも皆さんあばよ。

（おしまい）

三人兄弟

湖處子

ある處に三人の子を持つた一人の男が住んで居ました。追々と年はとるし、死ぎはゝ近くなるし、小供は

大きくなるし、今はどうしても相續を定めねばならぬ塲合となりました。しかし別に財產のあるといふではなく、譲るべきものといつては現在住まつ居る家ばかりてあります。ところが息子は三人とも孰れ劣らぬ利發な生れでありましたから、其うちの孰れに家を譲つたらよからうと頓に定めかねて、それにのみ心を痛めて居りました。或日好き思考が浮んだと見えましてポンと膝を打ち、早速三人の子を呼びよせて申しますには、我も段々年はとるし、娑婆に居るのも長くはあるまいと思へば、今よりお前等は都に上り、何がな一つ脩業して、其中成蹟の一番好つたものに家を譲るとしやう。

これを聞くと三人は勇み喜んで承諾をいたしました。そこで父は長男に向て、

「お前は何をやるつもりだ」

「私は鍛冶屋」

「それは至極よからう」

次男に向て

「お前は」

「理髮師」

「それも結構」

三男に

「お前は」

「私は左官」

「それも面白い」

さて三人は再び會合すべき日限を定めて思ふ方に出立し、それ〴〵善き師匠をとつて一心に腕を錬りました。

日數の進み行くと共に技倆も著るしく上達して、長男は間もなく御用鍛冶師となりました。心の内に思ふ樣。もう家はおれのものだ。

次男の理髮師も兄に劣らず立身して、さる公貴に出入

を許される様になりました。心の内に思ふ様。家はおれが讓り受けるに極つて居る。

三男は不幸にも賴んだ師匠の頑固で嚴刻しい男でありましたから、口に小言を絶やさぬのみか、粗相でもすると容赦なく毆打つけるので、外の弟子は皆辛抱しきれないで遁げ出して仕舞ました。が彼のみはじつと忍耐て心に思ふやう、こんなとで遁げ出す位では兎ても家は貰へない。

さて愈々會合すべき日となりましたので、三人はるばると故鄕へ歸りました。

しかしながら腕に覺えの技倆を現はすべき機會のないので、その方法もがなと、或日三人は父諸共ぶら〱と、枯野の中を漂ふて居ました。すると足元近くより一疋の兎が飛び出しました。これ屈强と二男の理髮師は駈けよりざま、瞬く間に其毛を刈取つて仕舞ました。

でかした、でかした、と父は頻りに感嘆し、さて家はお前のものだと云ひました。

この時四頭の馬車を驅つて前を過ぎゆく一人の紳士がありました。我腕前を見すべきは此時なりと鍛冶屋はすかさず走りより、先なる馬の蹄鐵を外し、車を止むる隙もあらせず、他の蹄鐵と嵌め更へました。やれ天晴れ天晴れと父は益々賞嘆し、優劣なき手練の早業、何方に家を讓つたらよからうと思案にくれし折柄、冬の日足の早くも傾きてはら〱と時雨催す夕の空を左官は打眺め、時こそ來たれと忽ち三人の頭の上に一つの屋根を葺きました。父は餘りの事にオヤーとばかり言句も出なかつたが暫くして非常に喜びましてさて家は三男に讓りました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

群書解題

徒然草

欲東翁

つれ／＼なるまゝに、日くらし硯にむかひ、心に思ふよしなしことを、そこはかとなく、かきつゞくれば云々、

これ徒然草の開卷第一に記されたる處なり、この一項によりて、此書全躰の意を推測し得べし、つれ／＼と唯ひとり、なす事もなくて淋しきまゝに、心に思ひ浮ぶこと、凡そ何々のわかちもなく、無暗とかきつけ行きしものなり、即ちかの所謂隨筆なるものなり。

正月遊のいろ／＼



札おくり

一部の隨筆、上下二巻のつれ／＼草、項を別つこと殆んど二百、實に實に、内容は千種萬様、神祇釋敎戀無常、天地四時日月星辰のことより、人倫君臣の道にわたり、和歌敷島の道より語つて有職故實に及び、小はごうなの貝殼より、鎌倉の海に多き鰹魚の事までかゝれたり、文章はいづれの段もいづれの段も、共に共にこれ玲瓏玉の如くにして、殆んど半項の傷を見ず、就中、四季の段、仇し野の段、飛鳥川の段の如きは、實に古今の名文、源氏にもまさるてふ評さへあり。

和文書の中、古來尤も多く世に行はれたる、實に此徒然草に若くものなし、これ源氏の如く、狹衣の如く、一篇の大部連續の文にあらで、片々たる斷片、加之ふるに文やゝ近躰にして、割合に解し易き

が爲なるべし。
今も猶ほ、各所の研究所、學校などに於て、此書用ひられざる所はあらず、苟くも口に和文國文をいふもの、誰か其名を、知らざるものぞ。
今も昔も、斯の如く世に弘く用ひられたる此書、註釋本の多きはもとよりなり、我これを先輩の人にきく、古來我國に於て、註釋本の尤も多きは、孟子と、徒然草となりと、我が不聞を以てするも、目にふれしもの、殆んど四十種以上に及べり、就中、尤も善きは、北村季吟の文段抄にして、國文といふことを以て、此書を研究するによし、林道春の野槌抄は、理想とか、或は主義とかいふて、其內容を論的研究するによし、若し兼好法師が傳をものせんと思はん人あれば、予は必ずや野槌抄を讀めよとすゝめん、又物識にならんと欲せば、徒然草諸抄大成を取りてよむべし、二十冊に渡る頗る細密の註釋、たとへば、開卷第一、日くらしといふ一言についても、ひぐらしと濁れば如何、日くらしといへば如何、これについて何某の和歌には云々、くれがしの詩には云々、など樣々の事をあげて引例殆んど二枚に及ぶ、もし注意して諸抄大成一部を讀まば、天地間知らざるものはなきに至らん、饗庭篁村先生かつていはれしことあり、汝諸抄大成を必ず讀め、高慢がるには頗る妙と。
さて此書の筆者をたれとかなす、後宇多天皇に仕へまつりし、北面の武士、左兵衛佐兼好なり、兼好は吉田兼顯が子なり、學和漢をかねて廣く、天台の奧義を極め、老莊の深きを探ぐり、和歌は其頃の名匠、頓阿、

正月遊のいろ〳〵



山さ川

淨辨、度運と名を齊ふして、四天王の稱へあり、後宇多天皇崩御の後、遁世して吉田の里にかくれ、俗稱を其まゝに、兼好法師とはいへり。

兼好、後宇多天皇の恩に感じて、身を以て忠臣の分をはたさんといふ心深く、常に南朝の不振を憤ほり、如何にもして、如何にもしてと、足利を倒さんの思やまず、樣々と手を盡したる果ては、足利の權臣高師直がために艶書をものし、大ひに身後の物議を惹き起せり。

老後しばらくは伊賀の山にかくれしことあり、茲に國守の專横をいきどほり、こゝもまた浮世なりけりの歌に、あふるゝ思ひをやれり。南朝の方より使ありて召さるれば、とるものもとらで馳せ登るも、北朝よりすれば、厚き賜物さへ退けて一もうくるなかりしと、誠におゝしといふべきなり、その他宇都宮公綱、藥師寺公義など、北朝方の人々の、訪ひ來て、歌のことたづぬるも、空うそぶきて、答へざりしときくだにも、いとゞ心地よし、兎も角も、彼れ一箇の硬漢なり。

觀應元年四月八日、六十八歳を以て逝けり。

家政　話のくさ〜

貫花

繼母

繼母とし云へばすぐ目口とがりたる意地惡き相貌を思ひ起すほどにて、家庭の不幸は繼母の必要なる場合ほど不幸なるはなし。されど世はま

正月遊のいろ〜〜



羅漢々々

ゝならずして、繼母なくては一家立ち行き難き場合も多し。繼母とて必ずあしきにあらず却て實母にもまさる事あるに、多く折合あしく、未だ相知り相親しまざるに已に快よからぬ感情を以て相むかふ。母惡くて折合はぬ場合も固より多かれど子供の僻みたる心より一家の波瀾起る時も少なからず。是とても全く幼少の時お順お友或は推ひろひ王祥王賢なぞさまゞゝの繼母の殘酷なる話をきゝ、また畫にも見て深く腦裏に印し、先入主となるによりてなり。然るに日本にては何處の家庭にても繼母の話を話種とせざるなく、甚しきは學校までも修身の敎訓に於て畫をかゝげて繼母の殘忍を語る。たとひ孝子をあぐるために話すとはいへ子供の腦中には孝子の殊勝なる心よりも繼母の殘忍なる事却て深く印せらるゝなり。繼母を有する子供の腦中には如何なる感を起すにや。つまり繼母の話は害ありて益なきことなれば斷然話種より除きて、家庭は勿論敎育にあたる人はよろしく心したきものなり。

正月遊のいろゝゝ


子供の失望

一と通り見識ある人にても他人より見くびられたる如き言葉をきくは、たとひ其人は何の關係もなき人とはいへ餘り快よからぬものなり。まして己れの敬愛する人よりいはるゝをや。大人すら然り、小兒の頃に父母兄姉より、おまへはだめだとかこまつたものだなど、目前でなくとも陰言にても一度小兒の耳に入らんか、其子供は自信自尊の心を失ひ恰も樹木の芽をつまれし如くなるに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あらざれば、自暴自棄の我儘者となるべし。父母長者の心す可きことなり。

ひゞしもやけ

追々寒くなるにつけひゞしもやけ等皮膚の甚しくあれて、見かけは固より、いたみて下婢などは自然何事をなすにも怠慢勝となり疎略となるものなり。尤もリスリン、旃檀の實汁、密柑の皮油、立貝の殻の黒焼などいろ／＼の藥あれど、始めよりかゝる慮なきに如かず。人の皮膚は清浄にするが第一なれども。さりとて餘りあつき湯にて度々洗ふは却て皮膚をあらすものなり。されば臺所の洗物にても可成水か微温湯にてなすべし。寒さの餘りあつき湯にて洗物し、直ちに冷き風にふるゝときは立處に顔手足をあらすゆゑに此理を思ひて少しくらひ冷たきは辛抱すべし。また水、湯にかゝはらずぬらしたる手はかわきたる切にてよく／＼度毎に拭きとるべし。小兒下婢などは面倒を見て度毎にいはざればなをざりになりやすきものなり。

正月遊のいろゝゝ



目かくし鬼

早咲法

都にては室咲早咲などありて年の内に春くれば別に必要はなきものゝ、慰みともなり、また田舎にてはいと興ある事なれば、左に梅桃櫻等の花を早く咲かする法を記さん。先づ咲かせんと思ふ枝を日向水を入れたる花いけに挿し、毎日日向に出して其水少なくなれば湯をさし／＼する時は次第に蕾太り口をひらくに至るといふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

色

同

一日或西洋婦人を訪ひしに、婦人二歳ばかりの小兒を抱き居りしが、吾が紫唐縮緬の風呂敷を携へ居たるを見て、小兒は手をのべて取らんとしぬ。婦人語りて云ふ、此兒は尤も紫色を好むの癖ありと。

色の嗜好は、子供の特質をあらはすものなれば、子供の敎育に注意する母保姆などは別して心をとむ可きことなり。

野蠻人は眼もいたき程の燃へたつ赤色を好み、趣味の高き人は白色を好む。子供の中にても紅を好むは大抵陽氣なる快活なる時としては浮氣なる子供にて、藍色紫色を好むはおとなしき子、黄色を嫌ふは神經質の子なり。

或盲人に赤色の布を見せしに、あつくして鐘を鳴らす如き騷がしき音聞ふと云ひしとぞ。牛馬の赤色を忌みて見れば怒り、蛇蝎の黄色を嫌ひて避くるなど、色こそ奇妙なるものなれ。子供と色の關係、よく注目す可きものならむ。

裝飾といへば、形恰好はあれど、先づ色の配合にて、人の美しくもさもなくも見え、裝の引立ち或は引立たず、人柄の上品に下品に見ふるなど、皆色の撰擇と配合の善惡に關するもの多きことごと〱しくいふ迄もなし。されば一寸クリスマス歳暮年玉に半襟などを贈るには、先方の年恰好を考へるは言ふ迄もなく、其顏色の如何を考ふること大切なり。色白き人にはさもなけれど、色の黒き者には紫、青なんどは甚だうつり惡くして顏色は黄みて見するものなれば、

正月遊のいろいろ



紙鳳

左る人には白茶の如きものを見立てゝ贈ると云ふ風にするが肝腎なり。

正月遊（其一）

黄花

正月遊も年々にふえていろ〜さま〜のたのしみある事なるが、骨牌雙六しあきたる折には左の一二の如きもまた一興なるべし。

（一）　暗號文字

先づ一同坐につきて後、發題者を定め、其人が例へば「こ。ど。も。がはねをつく」と心に考へ置き、其文句の頭文字こ。は。つ。の三字を一同に示して、各に解釋せしむ。一同は右の暗號を見て各頭文字の順に一文句を案出

正月遊のいろゝゝ



額おつつけ

し、筆或は鉛筆にて紙片に記し出す。一同集まりたるところにて一々よみあぐれば、或は「と。んぷがは。につ。まる」とか「こ。ぞうがは。お坊をつ。ねる」などいろ〜のおもしろき文句出づべし。投票にて最もよろしきものを擇び褒美を與ふればなほ興あるべし。

（二）　意外

先づ三人づゝ組をつくり紙を三つに折り、一人まづ和漢洋誰れにても一人の著者の姓名を記し、これを掩ふて次へ渡せば、其人は著者の名を知らずして書名を記し又之を掩ふて次へ渡す。其人は書名を知らずして批評をなす、終りて紙をひろげて讀み上ぐれば

（一）　紫式部　（二）　大字書

（三）　讀むに足らず

（一）セーキスピアー　（二）小學讀本
（三）經濟上の大著述なり
など、途方もなきもの出で來り隨分笑を催すべし。また人數次第にては、著者の國名年代或は著書の種目などいる、もよし。

或は又書に代るに品物を以てし
（一）餅
（二）黒
（三）すつぱい　（四）刺身にするもの
（一）船　（二）まんまる
（三）土にてつくる　（四）食物を煮るものなり
などするもよし。

正月遊のいろいろ



マーブル遊び

（三）數あそび

先づ各紙片に數字（可成單位をよしとす）を記し、一寸捻りて出す。親と定めし一人之を集めてかきまぜ、一つ宛各に別つ。さすれば各受取りたる紙を開きみて、其數に關係ある物名人名諺何にても思ひ出て得る限り紙片に認め姓名を記して親に渡す。其時間は十分なり二十分なり豫め定め置くべし。さて親は一同の紙片を受取り先づ其一つを開きてよみあぐ。例へば四の數なれば。

四月、　四季、　四書、　四天王、
四ッ谷、　四日市、

又三なれば

三人よれば文殊の智慧、　三途の川、　三國志、
三田、　三日月、

などあるべし。讀みあげたる上にて之を衆議に附しなほもれたるところを問へば、四なれば四十雀、四絃、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四ッ辻、三なれば三春三月憶三巴、三笠山などおぎなはるべし。かくて漸次に讀みあげたる上にて、それぞれ答の多少により等を定め賞罰をなすもよからむ。

（四）ものは遊

枕の草紙愛らしきもの、おかしきものなどの、ものはづくしにならひ、例へばおそろしきものといふ題を出し、各思ひ出るまに〱かきつらね、一人之をまとめて順次によみあぐ。

例へば

地震、雷、火事、親爺、

などの滑稽もあるべく、

泥坊、おばけ、

などのかはゆきもあるべく、膽のすはらぬ政治家ならば「鷹の爪を尖らして睨めたる」などゝ、かくなるべく、貧家の女房ならば「年の暮に掛取りの提灯見たる」とやかゝん。

正月遊のいろゝゝ



むかで

昔水戸烈侯臣下を聚めて「大きらひ」といふ題をたまはり歌よめとありけるに、藤田東湖とりあえず、

大きらひ唐茄子かぼちやさつまいも
　君の御前に悧巧ぶる人

とよみければ、一坐大に嘆賞しけり。又豊後の故五岳上人は詩書双絶の名僧なりしが、或時戯れに

わがすきは酒と肴と碁と將棊
　金と子供はいふまでもなし

わがきらひ天保と梨に瞽女やきふ
　うら打唐紙びくにしをから

とよみけり。かく歌にせば一しほおもしろかる可きも、むづかしければ前に述べたる通りにてよろしかるべし。

正月遊び（其二）

娯樂生

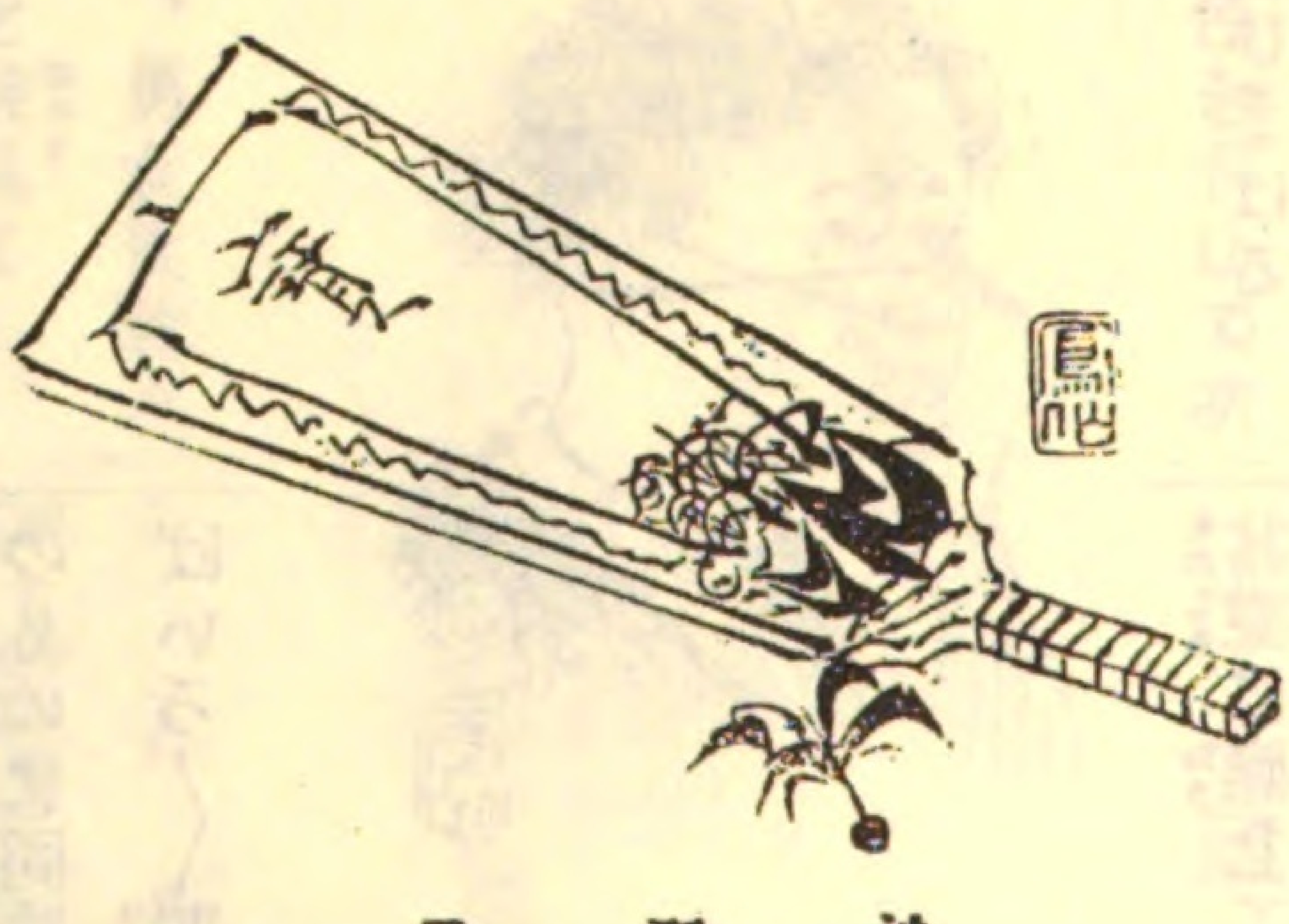
手鞠くはへ

これは男兒等が大勢座敷の內に集り、一人一人に演る遊戯なり、即ち適宜の大きさの手鞠を細糸にて天井又は鴨居より大低小兒の立膝して口に接する位地に手鞠を置き、兩手にて後に兩足を扼し膝頭にて歩き手鞠を口にくはへんとするなり。

膝釣歩行

これも大勢男兒相集り一人一人に演する遊戯なり、其方法は先づ胡坐になりて兩足を着物につゝみ、首より兩膝にかけて褌をかけ、臀部を疊より離れしめ、兩手を兩足に代用し、定めたる距離を歩行す（たとへば座敷を幾まはり）隨分可笑しき遊戯。

正月遊のいろ／＼



追羽子

鼻く丶り

鼻と耳へ紐輪をかけ、手を觸れず顏を動かして之を外づす遊戯、人々により其顏がをかしなものなり。

帽子かぶり

これも大勢にて遊ぶもの、成るべき大きな鍔太帽子を撰み、座敷の中に置き、片足の指にて撮みあげ、頂上に載する、これも勿論男兒の遊戯。

額おつつけ

座敷の壁の柱に足の爪頭より一尺五寸程も隔り兩足を揃え、兩手を後部へ廻はし、かく準備をなしたる後、額を柱につけては離れ又離れては附け、定めの數を試みて勝敗を決す。

鼻と耳

其方法は二人相對し、各自に兩手を交叉し、右を內にして左の耳を摘み、左手を外にして鼻をばつまみ、而

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して一二三の相圖と共に双方同時に、前の反對、即ち右の手を外にして鼻をつまみ、左手を内にして耳をつまみかゆる、幾度も試みてつまみ損ねる所が面白し、女兒にてもよし。

蜈蚣々々

數人の男兒相集り、各自其着物の裾の中ほどをつまみて前の帶の間に挿み、最初の人四這に、次の小兒は前者の股下に潜り込みて帶にすがり、次々に斯の如くし、最初の兒は蜈蚣の頭部の心得にて躰に左右に動かし廣き座敷か、廣庭などを這ひまはる。

羅漢々々

男女兒數人車座になり、一人づゝ輪番に羅漢の形容を擬する遊戯なり、先づ第一の小兒、隨意なる羅漢の形をすれば、殘の一同は其通りの形をせざるべからず、次の羅漢はどうしてどうしてどうなさると囃し立て順々に羅漢（羅漢と言へば一定の形あるやうなれど、如何なる顏、如何なる姿をしてもよし）の形を示し、殘のものに同時に其形を眞似しむるなり、急速が勝なればいろ〳〵間違つたる形をなす、此遊戯は目と擧動を敏捷にす。

正月遊のいろいろ



鼻くゝり

山と川

男女兒四人を撰み、第一及第二を山と定め、第二及第四を川と定め、先づ準備として山なるもの立ち、川なるもの屈む、別に號令者川と言へば其聲に應じて川なるものは立ち、山なるものはかゞむべし、號令者成るべく急に發令し、山と言ひ川と言ふ聲に應じて急速に立屈し、錯誤なきもの勝者となせども、號令の急なるに隨ひ、立屈に錯誤を生じ、なかなか興ある遊戯なり、これは耳の敏達を要す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

旗おくり

男女兒車座になり、五本の五色旗（赤、青、白、黒、黄）を製し、これを一本づゝ隣席より隣席へ渡す、渡す時其色を言はず他色を言ひ（たとへば赤ならば黄）白の來りたる時默してちよと戴き、又他色を言ひて次へまはす、斯くの如く順々に循環し漸々急となる時は、白旗の來りたる時、戴くことを忘れて次へ渡すに至る、これは負にて其仲間を退く、これは目の敏捷を要す。

ごろ〱

ごろ〱とは雷の音を擬したるものにて、男女兒數人車座になり、古帽子の如き柔軟なるものを遊具とし、一人立つて障子を輕く叩く其音の止まぬうちに、隣から隣へ帽子を送るなり、ごろ〱すとんと障子の音止みて帽子を持ち合せ居るものは敗者なるが故に、成る

正月遊のいろいろ



耳さ鼻

べく急速に隣へ隣へとおくる、されば帽子はもんどりを打つて膝の上を飛びまはる、なか〱賑かな遊戯なり。

歳暮の家庭

恕　哉

歳暮の家庭は、頗、多忙なり、先づ年中の大掃除を爲して隅々の塵、天上の蛛網など淨めざる可からず、借錢あるものは拂はざる可からず、貸金あるものは受取らざる可らず、正月餅の用意、注連飾の準備、歳暮の贈物、煮物の用意等、殆、寸暇なかる可し、中等以下にありては正月着の準備もあり、年玉の心組みもあり、却々に心の苦勞も多し、歳暮の家庭、概、斯くの如し、固より生活の程度如何

にもよるべけれど、安閑として雪を賞し、爐を擁して假睡を貪るべきにあらず、吾人は其多忙中に於て一の注意すべきことあり、抑、歳一歳に生活の度を高め、家庭の狀態をして餘裕あらしめんと欲するは誰も望む所ならん、本年は果して昨年に比して幾何程の收入ありしか、若くは如何ほどの支出ありしか、差引き如何ほどの餘裕を生ぜしか、將た如何程の不足を生ぜしか、これ實に家庭の上に最も大切なる事柄なり、この景況によりては來年度の豫算の目途も立つべき也、入るを計りて出づるを制するは家事經濟の上に最も猛省すべき事柄なり、收入に定額あるにも拘らず、無謀なる支出の費途を作るが如きは到底生存競爭のこの世の中に立つことを

正月遊のいろゝゝ



毬打

得べきにあらず、これ等の豫算を立て、必要支出の外は無謀の濫出を防ぎ、以て豫め歳暮の鬼の來襲を禦ぐの心算なかる可からず、故に此等の杞憂なからしめんが爲めに。各家に於て必ず歳末に際せば年中の收支費目を精算す可きなり、これ一家の主婦たるもの、任務なり、日記帳を繙きて本年は幾らの米を食ひしか、幾らの薪を費やせしか、幾らの油を用ひしか、新たに衣服を調製せし代は如何程なりや、醫師の藥價は若干なりや、牛乳代は幾何なりや等を精査して、來年は病氣に罹らぬ樣注意して藥價の費目を省き、以て着類の一枚にても新調するか、又は滋養物にても食はねばならぬ抔、一年中の日記に照して猛省すべきなり、本年も亦一週日を出で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずして新陽を迎へ、年と共に新になり、屠蘇を傾け、餅を喫し、羽子を逐ひ、毬を打つて樂み、和氣靄々、家族團欒の和樂を欲するものは、必ず前述の如く其商たり、工たり、農たり、官吏たるを問はず多忙中を排して年中の計算を立てざる可からざるなり、

内職案内

ライス製造業

此の職業は女子に限らず、男子も亦た營むを得べけれども、男子は男子の健手を要する所を製し、女子は女子の纎手を要する所を作り、各專門とする所あれば、玆には女子の内職として專ら營み得べきものを紹介せんとす、ライスとは米にて作りたる玉にて、少女の指環などに用ひられたる、俗に南京玉と稱するもの是なり、此のライス玉を作るには、米を細粉とし紅、赤、黃、青、紫等の色に染め、固めて小球となす、これまでは重に男子の職に屬すれども、小球に出來上りてよりは、專ら女子の微妙なる手を以て、數百の球に糸を貫き一個の球狀を造り、その球細にて花形、菱形、唐草形等種々の摸樣に編み付くるなり、此の職業は他の内職と異なり氣根を勞する少なく且つは美術的快味を備へたれば、少女の内職としては好適のものなるべし、拾四歲以上の女子は誰にても三日間無賃にて見習はゞ、直ちに技倆相應の賃錢を受くるを得、賃錢は始め七錢位にして熟練次第漸次に進んで十五錢より二十錢位に至るといふ。

正月遊のいろ〳〵



輪まはし

内職業は何れも其の獲る所微少なりと雖、これがため家政上に及ぼす效果に至つては、更に莫大なる實に驚くべきあり、記者内職業者の語るを聞ける事あり、曰く内職を營みて家計を利する誠に鮮少なれど、時間を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

節し得ること夥しきは世間話の御相手等の如きに時間を浪費ぜずしますむことゝ、と、目ら內職を營むで職業の困難を知りしと共に又子女に示して其の大切なるを知らしめしことゝなりと、以て家政上養育上內職の益する大なるを知るべし、記者の內職業を紹介する所以の微意亦實に玆に存すればなり。

近頃芝山內にライス製造所起れり。



正月遊のいろゝゝ

手毬くはへ

歳末歳始の贈物

▲梅干沓　本年は收獲も未だ捗々しからず一帖新物五錢より十錢なれは上々飛切りは十二三錢迄ありお手輕專一なり

▲玉子　上戸下戶の別なく二十五錢の折詰より一圓位迄お歳暮物中の頭株なり

▲砂糖　和白にて十二三錢一斤袋入りより氣張りし向は樽詰一圓十錢位は頗ぶる立派なり貰ひし方も德用

▲角砂糖　コーヒト入りにて近來の流行物一圓位箱入り上等社會紳士連中の間に多く用う

▲西洋酒　直段は御承知ビール又は葡萄酒先々により二本又は半打より一打

▲海鼠腸　一寸氣取り連中によく一合入り二三十錢以上二合入四十錢位上戶一天張り

▲蜜柑　箱入三十五錢は下等六七十錢は上等籠入りは十五錢位より

▲鹽引鮭　本年は安からず二十七八錢は小さく三十五六錢なれば可なり立派二本詰め箱入り一圓位ゐは一寸目先き變りてよし

▲鹽引鱈　十五錢より大は二十二錢位中以下の遣ひ物なり

▲醤油　上銘物一と樽は中々の奮發二圓位より二圓十錢併し貰ひし家では極々此上なき調法妻君の大よろこびなり

▲鴨（籠入）　番りしむきの品物奇籠入り一と番ひ一圓五十錢より一圓八十錢迄なり

▲粕漬　鴨の粕漬鯛の粕漬五六十錢より一圓迄が昨年來より流行

▲鑵詰　野菜類、菓物又は牛肉、かき、鮭外種々あり凡十五錢より品物により五十錢迄是は便利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲塩詰 福神漬、ラッキヤウ、蕪外いろ〳〵十錢より三十錢位ゐ本年は概して此類賣口多し
▲佃煮 府下へは餘りおもしろからぬも各地方へ對しては極八よろしく賣ひし家でも調法價は折詰め二十錢より三十五錢は飛り切りなり

社交一斑

流行の栞

流行子

新年流行の禮服

正月遊のいろ〳〵



貴婦人社會　令閨の新年禮服には上着を黒のふき模様の五ッ紋、下着は白の紋鹽精か羽二重、但し調製は比翼よりも通しの方多かり、三枚重、長襦袢は白の紋縮緬、襟の白は紋鹽精、帯は寄金糸錦の少さき蒿き又は唐草模様、これは質素なる嗜好に屬す、上着を利久鼠にし、下着二枚を壁鼠か小豆鼠にて三寸高の裾模様、銀鼠の紋羽重又は紋壁の古代大模様の長襦袢、白の紋二羽重光琳亂水菊の大模様半襟淡利久、紫根、貴族鼠の繻珍織にて、古代中模様の帯を好むものは派手なる流行と知るべし。令孃には櫻鼠、淡小豆の一尺五寸高の裾模様三枚揃か、下着二枚を紅掛鼠、紅藤の内にて撰む、但し模様は上着と同様にしたるもの、若し高尚に好めば黒の古代大模様彩色なしの白にてあらはし下着二枚を淡櫻又は鳩羽鼠の大模様鹽精の無地か、或は小模様の鹽精、或は縮緬を上着同様の彩色なしに揃へしもの、長襦袢は緋の紋壁か紋羽二重、襟は白の琥珀か壁ちよろの錦糸縫の亂模様、帯は(一)厚板の古代大模様(二)糸錦の有職模様(三)繻珍の寶つなぎ、最流行す(但し紋の個所は三ッ紋五ッ紋伯仲)

町家の婦人　小紋の三枚重、無垢仕立、比翼の調製多し、長襦袢は壁鼠の紋縮緬か、同じ色の無地縮緬、襟付白の壁か、白羽二重、帯は繻珍の黒、千歳、法鐵のこまかき友模様を好むは町家の女房（但し紋は三個所に限る）、高砂染の小紋、裾を紅掛、紅藤、淡櫻の縮緬、
膝　紅の玉糊縮緬が華美なる幽禪縮緬の長襦袢、紅がけ、
約　紅藤、淡櫻の亂大模様の半襟、糸綿、繻珍の古代松竹
歩　梅大大模様の帯を好むは町家の娘（紋は三個所を出で
行　す）。

上等社會(男子)　羽織は市樂又は紋鹽精の五ッ紋、衣服は上着諸糸萬筋、下着小紋お召、帯は繻珍又は博多の七寶或は龜甲つなぎの大模様、長襦袢は淡鼠縮緬の無垢仕立、胴は淡泊なる大模様の染大したるもの、上等社會中第一流のこのみ。

中等社會(同)　黒七子又は黒羽二重三紋の羽織に市樂の上着に風通織或は入端又は綾糸織の下着二枚がされ、帯は博多の片側は無地、淡色微塵最流行、

平民社會(同)　黒三紋の峯書紬の羽織に銘線の上着に琉球のかすりか、秋田の珍八丈の下着、帯は博多の紺又は鐵の無地は商人社會の手堅き風俗。

以上袴は(一)博多(二)練仙臺(三)山邊里織(四)節仙臺。

禮服以外の贅澤なる流行は婦人に於ける郡紬(白木屋新織)の書生羽織、大斜綾の吾妻コート。男子に於ける大島紬龜甲絣の羽織、衣類揃ひ、斜小紋形お召の書生羽織、黒縮緬、黒羽二重の五ッ紋無双羽織。小紋お召三枚重淡鼠絹の襲。銀鼠、淡雛卵、金茶、お納戸等の献上博多帯、脊ぬき大模様縮緬の胴着及襦袢。紺市樂五ッ紋羽織の裏に紅匹由羽二重を用ゐ、衣服の下着の胴に幽禪縮緬を用ゐ、襦袢の袖に淺黄さ鼠の染分匹田を用ゐ、花色、紫根、落花流水の繻子の三寸巾帯を用ゐ、銀鼠太丸打の紐を結んだり解いたりさても忙氣に見ゆるは言はでもしろき、松の内の宴會席又は寄席にて見ゆる高等の男藝者なり。

新年髮具　(端物)

新年にちよいさ面白きちよいささしは、酉歳を當て込みたる寳入の簪又は一位の木に酉歳の祝意を表したる蛋櫛、又は玉を鷄卵さ見立て脚さ母鷄さ見立てたるちよいさしなど南傳馬町大四白牡丹の意匠おめでさうは角製小豆様のちよいさざし面白し、八千代かけの掛物目出たし

正月遊のいろいろ



帽子かぶり

雜録

船茂婦人略傳

(前號にも一寸記し置きたれども投書のまゝを)

文化の頃源川の商人にて船茂平六といふ者あり二女のお愛といふはいとけなきより父母によくつかへしが十一歳の時淺草藏前山田と申方へ小間づかへに出家にありて親にそむかぬものは主に仕へてもまめ〳〵しけれ

正月遊のいろ〵〵



雪だるま

ば山田の妻女もかわいきものに思ひ十二歳の春主人秘藏の南京の皿をあやまつて取落し破りたればいかにせんと涙にくれたるを妻女はあわれみひそかに似たる品を求め亭夫の手前をつくろい置きけりお愛は此恩に深く感じ片時も忘るゝ間なく思ひ其年の十二月夜此家へ盜人しのび入妻女の櫛笄がいの入れし小文庫を持出しあいの足をふむ愛は驚きさめ見れば盜人は妻女の大切の小文庫を持倘もめぼしき品をさがす樣子ゆへあれ誰かお孃さんの人形を持てゆきますと起上りさけべば人形かと思ひしや盜人は其小文庫を愛に取打しまゝ家内の起出るにおそれて何品も取得ずして迯去たり主人もお愛が此急なる場合に人形の箱なりとさけびし機智を賞し妻女は皿を破りし時の恩を忘れずおそろしきを忘れてこゑあげし志ざしを感じ一入不便を加へたりとぞ此内に平六の家は長女にむかへし聟の不埒より身代かたむき加へて平六も病死し聟も離縁し家も賣拂ひ長女と三女をともない母は裏家へひつそくなしお愛は此時十四歳山田より暇をとり母姉妹と相談の上姉はまた他へ縁付妹と母を置其身は深川仲町前松といふへ仲居奉公に出其給金又は祝儀等にて母と妹とを養ひ續け廿六

歳の時より夫を持ず何歟女斗りにて家業の出來る事を致度と思ひ淺草田町へ引手茶やを初め其身はかねて母孝養の爲芝山仁王尊へ無病の祈誓をかけ妹に聟をとり其聟病死したれば遺子を我子とし唯母の心安きのみ樂み暮すに文久二年八月母の十二歳にて老病にてめで度終りければ是にて我らもつくしたり此上は心に懸ることなければ何か夜にまで殘る事を致置度と思へ共元〻非力の身なり女子の事なれば際立たる事は思ひもよらずと年月をおくる内送療に手の及ばざるもの親死んで葬る事ならざる者又は主人の金を紛失して死せんと思ひつめしものなど救ゐし事度〻あり養育院育兒院は年〻金參圓づゝ修身寄附し盲啞院も金壹圓五十錢づゝ寄附す明治十四年牛島學校建築の時所有地三百餘坪をその敷地の内へ無代價にて貸渡其外學校には心をつくし公共事業に金を投ずる事もあり其筋より木盃賞狀下賜數度なり是も資產ありてなすにはいかあらず身をつゝまやかにしつゐへをはぶき一意慈善の事につとめたるのみ明治十五年七月七十一歳にて沒しぬ其跡某も志さしをかへす務るよしお愛常にわれなき後は此家業はそれ迄と思へど申置ければ死去後五年を過ぎ改業せし祖は出羽の國雄勝の產船元泰貞と申者なりと

附曰同婦人の詳傳は日本橋區通三丁目書肆林平次郎方より出版すべしと聞く

於母影

静雪生

足の裏らの冷たくなりしに目が覺むれば表ての道を步む人の霜蹈む下駄の音ミシミシと鳴り、見れば硯の水も氷りぬ肌寒き寢開衣のまゝ雨戸くり開くれば木の葉ハラハラと落ちて針で刺す樹な朝風車井戸の釣瓶繩る音も氷りぬ、戰慄ひながら床を上げ朝の掃除も終り手も斷るゝような井戸の水に顔も洗ひ纔ては朝餉も了

へヤレ此寒き日も學校がと不思火鉢にしがみつきサテハ今日は日曜なりき訪ふべき朋友も居ず遊ぶべき樂しみもなし、いで日頃戀しく懷かしき故る鄕に思を通せばや

吾故に鄕は雪の越路の北の隅り、村は七葉山の西麓、新潟から奥羽の街道筋、一里餘りも隔りて名高き菅谷の不動といふがあり、加治川の淸冽き流れは村に沿ふて溉ぎ村中の飮料灌ぎものサテハ又時々米積みし船をも新潟迄運び此河に架された橋を渡ると向ふの岸は一面の桃林菜畑蓊鬱と茂れる杉の森の小暗き影には天神の宮といふがありて西を東と漂泊へ行くお祓さまは誰が敎へねどいつも爰を定宿とし

天神の森を離れて南に一丁程、街道に沿ふて、そこには往來の氣休め足休め淸水屋といふがあり、此家の裏手に湧き出づる淸水、夏は舌も斷るゝばかり冷かなれば水無月の文字もあつき夏の盛りは村の者の夕餉したゝめて後ち橋の上に涼みを納れながら此茶屋の裏庭に集ふが常なり實に此茶屋は夏の日の吾村の倶樂部なれば

二葉山とは雅名にて地方で加治山と呼ぶは村から八町程隔たり昔し佐々木盛綱の城ありし跡今に殘り、火攻めに城を落されし名殘り、黒き燒米は今も猶ほ地の下二三寸堀りて出づる故煎じて風邪の藥に効能ありと山に遊びし誰れもは袂にして歸りぬ、秋は此山の松茸とりわけ味好ければと八九里先きの新潟からも茸狩に來るは年毎となり

吾家の二階の窓よりは此山の姿、春は綠り、秋は紅への裝ひも目の先きに見へ、我は夏の晨た山の背より朝暉のムク／＼と顏を出すが面白く雪の夕べ綿帽子被ぶれる花嫁の樣なりしを愛でき

我は此山と此河との間だに生れ開けゆく世の御惠はいつ方も同じ敎の道も、我れ幼き頃は裏らの觀音寺が假

りの校舍、我れ入學してより程なく村の北に方れる神明の社内に小學校は立ち訓導樣といふも來りぬ、我は七歳の頃より學の庭に通ひ初めて暖かき家庭に養はれつ、樹影の雪も消へそめる春の晨た凧の鬪ひに餘念なく梢の蟬に晝寢の夢を破らるゝ夏の日は加治川の流れに魚を捕らへ水を泳ぎ麓の紅葉、かきしぐるゝ秋は朋友と打ち連れて山に遊び暮らし霰の窓を打つ冬の日は雪玉投げに餘念なく昏れては巨燵に暖まりて母の懷ろに昔し語りを聽くが何よりの樂しみなりし

「噫夫此河漸々舊の如くに流れて水舊の如くに清冽けれど、凧の鬪へ、雪玉投げに餘念なかりし我に早や人生の半ばになりなんとし日に日に訪ひつ訪はれつ兄弟の如く睦ましかりし文の君は今は苔むす丘の上一抔の土に掩はれて眠り給へぬ噫夫此山舊の如くに綠り濃かに花も匂へども幼き我を此上なう愛しみ給へし伯母の君は鳥野邊の墓標と化し給へぬ」

吾村は家の數三百許り大方は農で立ち僅か計りの商ひを爲すもあり吾家は村の中央にて屋後には吾村の聖彼得寺院なる觀音寺といふ禪宗の寺あり、吾家の裏門の直ぐそこには卵塔場ありて雨の蕭々降る夜青き燐火が焰へ上ることあれば我れは幼き折に窓から卵塔場の見ゆる便所へ行くをいたく好まざりき

吾家は父と母と祖母と幼き弟妹とあり、父はいたく物の本をば好み給へて寢ぬる前には本を手にせざれば眠り給はざるが常となりぬ吾父は幼き折に父に別れ母の手一ッに育ち給へて若きより家事にたづさわり心を碎き給へければや此頃は稍健康を缺きて一と日も早く我の業を終ゆるを待ち給へり况へて此頃は吾家の家計もいたく衰へて父君の御心を痛め給ふやらん日に日に繁き御便りも今は稀れに送り給ふのみ

吾弟は愛年は早や十三にやあらん、幼き折の可愛ゆげなりしお母影今も離れず、吾心の結ぼれたる折ふし弟

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の笑貌を見て我は己のが心の欝さをば掃へぬ、一と年せの春我れ郷里に歸省したる折渠は表ての戸に凭りて夕べの空らを眺めてありしが車の上なる我貌を見るや否戸内にかけ入りて、兄さん歸りませし歸りませしとあまり大聲に喚めきたてゝ皆が笑ひし時に其圓らなる目をばグルグルさせて驚ろけるげなる顔の我れには如何ばかり可笑しかりしことぞ。渠は一昨年の春家より一里隔たりたる某小學校に入りてより朝な／＼辨當を腰に纒へて通ふなり霰の窓打つ此頃は眼は寒さをば忍びて日に日に一里が路を通へつゝあるやらん、あわれ生ひ先きめでたかれと祈る渠が身に微恙だもなかれかし

妹は早や十歳にやあらん渠は我等兄弟二人り男子のあとの女子にしあれば一入母の鍾愛も彌増し、其優しき目と口とは亦他の人々の愛をも迎へつ實に渠は吾家庭に芳芽を添ふる花なりき此幼き妹は我等兄弟の中には最も優しう從順しう父母の叱責を受けしことなどあらざりき渠は未だ父母の訓へに背きたることなければ妹は今村の學校に通ひつゝあり叟年の正月なりき父君が勸め給へしにやあらん弟と二人りして幵が二日の書き初めの清書をば送り越しぬ、妹の書きたる松竹梅の三字指の先きにて捺りたらん如く我れも幼かりける時には斯くありたらんなど思はれていと可笑しかりき弟は稍年長けたる丈けに左の如く文しぬ

恭賀新年候然れば兄上樣無事御重年奉賀候就ては家内相揃へ達者にあらせられ候間御安心被下度候
敬白

明治廿九年正月二日　平治拜

兄樣

學校にては妹はいつも級の首坐を占め叟年の四月の試驗に賞典を受けしなど父君の手紙の中に見へたれば我も又幼きものゝ樣に嬉しく思はれぬ、ア、此寒き日渠

は如何にあるやらん

我は世の人の情の冷かなるを見る毎とに一入父と母とを懐しさ彌増し世の友の愛の僞りなるを見ては轉た弟妹が自らなる友情の戀しく思ひぬ。我は世の志士とやらん人の如く然る望みもなく事業家とやらん人の如く事業をも希はずさりとて學者とならん心もなし我には忠といふも孝といふも義といふも或るは叉譽れなのどのけじめはわきまへず、我が物學びするは國の爲めに爲すにはあらで父と母と弟妹と而して祖母と凡べて暖かき我の家庭の爲めに勤むるなり我は我家庭をば天國の如く極樂淨土の如くしたらんには最早望みなく唯心のまゝに言へ心のまゝに行ひ心のまゝに喰べんにはずべて事足りなむ

十二月某れの日記



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一月九日發兌　廣告締切　一月四日限り



第三百三十號

闇魔地藏　山田美妙

作者の手腕は言ふまでもなく、人皆之を知る。此篇は則ち其多年修練の結果として、而も其非常なる苦心を經過して成る。人情の極致發揮して遺憾なし

氷室守　江見水蔭

山間の靈泉、谿中の小池、氷室の番人、薪賣の少女、冷かなる中に火あり、熱かなる中に氷あり。生死いづれか樂しきてふ例の研究問題。又しても戀愛小說とてむげにな斥け給ひぞ。

ひとり者　小杉天外

區役所の小吏、煙草屋の少女、相結して拮据辛酸五年也。料らざりき忽ちに人の妻たる一婦人を見出さんとは。人は紙幣の燃えて烟片々たるを見たりと云ふ。

『歷史上に於ける佐倉宗吾』　湖處子

或は遠く遺跡を訪ひ或は博く舊記を繙き、經營慘憺の餘、一個の義民を躍出せしめんとす。作者が常に所謂筆墨の外主張あるもの歟。

東京市京橋區日吉町四番地
發行所　民友社

○小兒○

はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

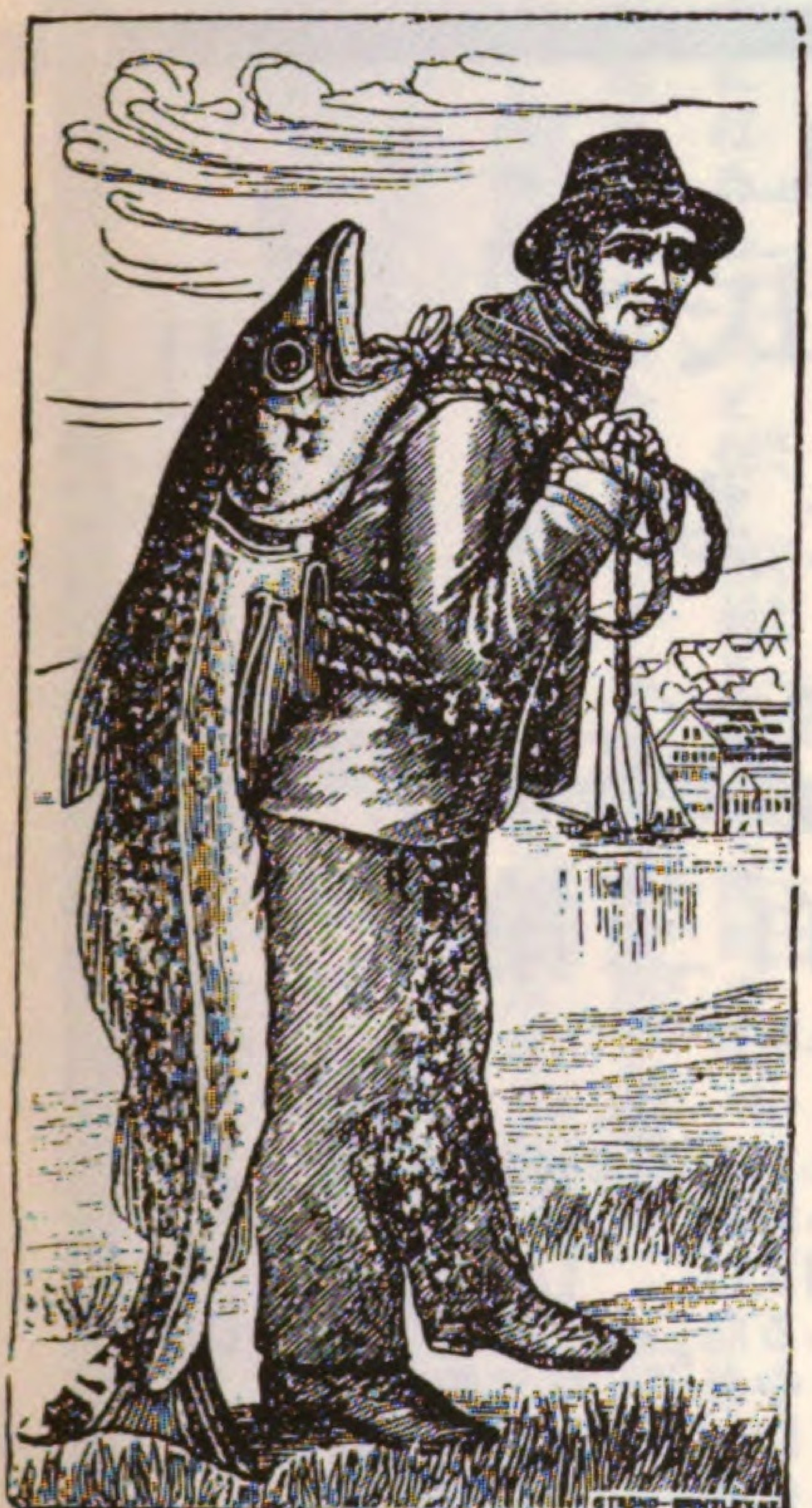
特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に[illegible]るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益することと實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居徳兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

明治廿五年九月十四日遞信省認可）
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6～11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版(株)

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

UC-NRLF
B 3 465 731
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA